Ⅴ．資料

１．専門家からの提言

１）在京専門家からの評価・提言

（１）国際連携・ネットワークの視点「アジア政策への提言（多賀秀敏氏）」

＊本提言は当研究担当者のインタビューメモをもとに多賀氏が加筆修正編集したもの。

①はじめに：これまでのアジア政策に対する評価

「福岡はアジア、アジアは福岡」という意識は、国際関係研究者、自治体関係者、出張の多いビジネスマン、近隣諸県の住民などには、プラスのイメージとして定着している。福岡市民が他県の友人知人に「アジアマンスだから遊びにおいで」とメッセージを送るまでに市民にも定着した。

美術展、トリエンナーレも同様の価値がある。中国の若手芸術家の勢いは刮目すべきであろう。このエネルギーを、福岡で受け止めることは、帳簿では見えない効果を福岡にもたらす。文化ネットワークは、先進的であり大切にすべきである。

国内外から人が来て都市が活気を帯びるためにもっとも大切なのは、来訪目的があること、知名度が高いことである。その点、グルメ志向は、他の価値と掛け算できる。福岡市の海外イメージ調査には、豚の骨のラーメンという言葉も出てくる。他の都市にはない有利さをすでに有している。海に面して港や風光明媚なところという印象もでている。「美しい」は大切にすべき価値である。匈奴、フン、蒙古、韃靼のくびきに悩まされた欧州の人向けには「元寇跡地」×「食べ物」＋イベントという作り方なども面白い。

こうした豊かな可能性を背景に、報告書を読んだ際に、職員の方々が素晴しいと率直に感じた。一都市の国際化についてこれだけ多くの職員が意識を持って語り誇れるのは素晴しいことだ。職員がこんなにも熱っぽく構想を語れる都市は、寡聞にして他には聞いたことがない。

また、政策のある種の頭脳に当たるURCがこれまで受託して世に問うた研究成果の蓄積には、感動を覚える。これらの蓄積をもっと活かすべきであろう。整理して世界中に公開できる体制にある程度整理すれば、福岡に問い合わせれば、何でも分かるという評価を得るに違いない。しかも、冒頭で述べたように実体を伴っているから説得力を持った回答を与えることが可能である。

岩波書店発行のアジアに関するデータ集も 2004 年時点で更新されないのは、2005年以降の中国の都市の経済関係以外の統計が公開されなくなったからにほかならない。現地に行かないと分からないというのが実情である。URC は、そうしたデータを中国から求めて所蔵している。そういうことを発信していくべきであろう。

②アジアとの戦略的連携

架け橋としての朝鮮半島を利用する発想を持つべきである。奇しくも韓国では、日中間の戦略的架け橋になるという発想を多くの人が共有している。博多・釜山のフェリーに大型バスを簡単に通れるようにすれば、福岡→釜山→仁川→中国にバスに乗ったまま船で行けるようになり、拠点化する。終着点というイメージを作っていくべき

だ。アジアに行ったら最後には福岡に着く。ヨーロッパ、アフリカ、中東、インド、東南アジアからやってきて、ユーラシアの旅は福岡で終わる。最終地点は出発地点でもある。アメリカ、オセアニアからやってきて、ユーラシアの旅は福岡に始まる。

若手研究者の中には、北東・東南アジアの環境問題の結節点は福岡だと言う者もいる。今以上に、知的集積する都市にせねばなるまい。そのためには、もっともっと戦略的志向でアジア諸都市に対応する必要がある。距離は死んだといわれるこの地球化時代にバーチャルでよいから距離を示すことが大切だろう。横浜のシティネット、福岡のネットワークが、今後銘銘どのような役割を担うのかを、考えるべきだ。福岡の意味と役割を深めてほしい。福岡単体でなくネットとしてやっていく。福岡と釜山、仁川、大連など掛け算していく。そのための準備はこれまでにできている。

③都市の岐路・高等研究機関などとの関係

都市は、岐路に立っている。福岡市が、県、九州を考え、九州全体の情報発信基地として、機能転換する。そうすればするほど福岡市の輪郭はぼやけていく。他方で都市機能は市に集約していく。この２つの選択の岐路に立っている。上海は広域上海を上海と言う。都市部のみで成り立っているわけではない。どういう風に City of Fukuoka としてやっていったらよいか。語感としては、Hakata のほうが世界的にとおりがよいが、使い分けすべきであろう。

都市の自主性を強めるならば、都市国家シンガポールがひとつのモデルになる。税関での手続きや面倒なドキュメントを簡素にし、一括処理をするようにした港湾局の事例などが参考になる。福岡も横並びを排せるならば同じようなことをすべきで、バックヤードに関する研究会なども開催してはどうか。

ケニアのナイロビの国際性は UNEP 本部で保たれている側面が大きい。福岡市は国際組織 HABITAT を活用しないともったいない。海外に行くと国連職員は国賓扱いされる場合もある。外交現場を経験できる人材育成の場として国際機関への出向などは価値がある。

福岡市が受け入れてきた海外からの研修生のアルミナイ（同窓会）はどうなっているか。早稲田大学では近年かなり海外同窓会のネットワーク作りに力を入れており、財源や国際化の上で価値ある重要な存在と位置づけている。

国家戦略における地方都市、大学のネットワーク形成の取り組みとして、タイのチェンマイ大学等の事例は参考になる。近隣諸国の中堅どころの人材を集め、NPO や役所などと連携しながら訓練するプログラムを実施している。タイの大学は役所などのノウハウも取り入れ、具体的かつ実践的な研究を行っている。このような国際的な活動が受験生にも評価される時代になってきている。

④おわりに

たとえば、個人的にだが、そろそろどこかでだれかが、アジアのポップスを体系的に整理してほしいという要望を抱いている。これをやれるのはどこかと考えると、福岡がイの一番に挙がる。高等研究機関が集中し、「アジアなら福岡」というイメージを有し、九州 LoveFM などの実績がある。それを整理して情報発信してもらえれば嬉しい。

つまり、もはや福岡は、福岡がやりたいこと、やれることをやるだけの時代を卒業しつつある。「これについては福岡がやってくれるだろう」と世界から期待されているので、やるべきこととしてやるという時代に遭遇しているということにほかならない。

（２）国際官民協働・市民交流の視点「東アジア共同体と福岡市（毛受敏浩氏）」

①潮目が変わった

昨年から今年にかけて潮目が変わったと感じることがある。それは国内での日本の将来に対する見方とアジアに対する期待感の変化である。日本の今後に対しては悲壮感が圧倒的に強くなった。政権交代によって日本が起死回生に転じるという期待は今のところ見事に裏切られている。その一方で、長期的なトレンドである少子高齢化による重い課題が国民の意識を深く浸食し始めている。日本の今日の社会状況そして将来のあり方への悲観論が巷に渦巻いている。

一方、その裏返しのように急激な高まりを見せているのがアジア、とりわけ中国との交流への期待感である。日本はこれまで中国と韓国それぞれに歴史的、地理的な課題を抱えてきた。それが時に政治問題として浮上して、両国の関係の悪化を招き、地域社会や市民が構築した両国とのきずなを何度も傷つけ、一部の右翼的な勢力を勢いづかせてきた。

しかし、将来の日中のポジションの違いを多くの国民が思い描くようになった今、これまでの対立の種を封じ込め、アジアの活力を国内に呼び込むことが、日本が再生を図る近道であるとの認識が広がっている。そして、その具体的な方策について多くの自治体や企業が模索を始めている。今ではトップセールスと称して多くの知事や市長のアジア詣でをくり返すことが日常茶飯事としてくり返されている。アジアとの距離を縮めることが、地域社会の将来を左右するとの認識が急速に広がりつつある。

②福岡市のアジアとのつながり

福岡市はアジアと長期的な視点で交流を続けてきた。それは単に経済交流だけではなく、学術、文化・芸術、市民交流と幅広い。1989 年のよかトピアの開催が大きな契機となったが、それ以前から福岡アジア美術館など、アジアとの交流を深める多面的な交流が行われてきた。また市民レベルで行われているアジア太平洋こども会議・イン福岡は、毎年数百名の子どもたちを各国から招聘するもので全国的に見ても極めて規模が大きく他の地域では決して見られない事業である。

福岡のアジアとの交流の強さはその歴史、交流の幅の広さ、多様性、厚みとどれをとっても他の自治体に引けを取らない強味をもっている。他の自治体がトップセールスに奔走するのは、そうしたアジアとの蓄積をこれまで培ってこなかったからこそ、トップが動かなければならないという事情が隠れている。

③新しい次元の交流へ

では福岡市のアジア戦略は盤石といえるのだろうか？基本的には他の自治体が福岡のレベルに追い付くまでには相当の時間がかかると思われる。その意味で福岡がアジアと築いてきた多層にわたる交流の経験と人脈は何にも代えがたい財産である。

しかし、他の地域も姉妹都市交流などを通じてアジアの各地とさまざまな交流のきずなを持っている。そうした中から大化けする活動もでてくる気配もうかがえる。貿易、投資、観光、人的交流といった単純な割り切り方ではなく、それらを複合的に組み合わせたものや規模の大きな事業が今後、数年のうちに各地で開花する可能性がある。その意味では福岡市もうかうかとしてはいられない。

福岡市として取るべき道は、これまで培った多層のアジアとの交流の中身や相手地域の状況を今以上に市民、企業、NPO・NGO、学校などに情報提供し、かれらが能動的にアジアとの交流に参加する意欲を掻き立てることである。

そのために、たとえば、アジアから若手経営者、社会起業家、女性リーダーなど活きのよい人々を福岡に招き、福岡のビジネス、NPO、教育者ら各層の人々と交流する機会を作ることができれば福岡市民も一念発起する機会も生まれるだろう。日本人はかつての活力を失いつつあるといわれる。混沌としたエネルギーの渦巻くアジアをテコにして沈滞している日本を再生する戦略を示し、そのリーダー役を果たすこと、これが福岡がとるべき道であると考える。

④「東アジア共同体リーダー都市」をめざせ

さて、国政レベルでは民主党政権によって東アジア共同体を目指す構想が提案されている。普天間問題で進捗が遅れているとはいうものの、東アジア共同体の構築は今後、政権を超えて継続して取り組まれていく日本の大目標といえる。中国、韓国、ASEAN諸国も東アジア共同体に強い関心を示している。もちろんEUの今日の姿に東アジア共同体が近づくまでには数十年にわたる年月が必要と考えられるが、防災をはじめ保健医療、国際犯罪、トラフィッキングなどグローバルな個別具体的な課題についての東アジア各国の協調や協力は着実に進展している。

こうした状況を考えると、アジアの都市間ネットワークに力を注いできた福岡市としてとるべき方向は、自治体レベルのネットワークの構築が東アジア共同体の土台となること、そしてその土台づくりを担うリーダーとしての役割を福岡市が果たすことを明確に打ち出すことと思われる。

それは何も今までと異なる方向を目指すことを意味しない。従来の都市間ネットワークの交流に、東アジア共同体に向けての政府や国際機関レベルの動きとの連携の可能性を探りつつ、日本国内に対して、また政府や国際機関に対しては、東アジア共同体の土台とも言える自治体連携を福岡市がリードすることを宣言することである。また他のアジアとの都市に対しては東アジア共同体というより大きな潮流との橋渡し役を福岡市が果たすことを打ち出すことである。都市間連携を東アジア共同体という大きな枠組みの中に位置づけ、その中心的役割を果たすことが、ダイナミックな発展が続くアジアの都市・地域間競争の中で福岡市の存在を輝かせる重要なステップとなるだろう。

（３）国際文化交流の視点「美術文化から見る「福岡のアジア」（岸清香氏）」

＊本提言は当研究担当者のインタビューメモをもとに岸氏が加筆修正編集したもの。

①アジア政策の成果としての福岡アジア美術館

日本国際政治学会の国際交流分科会に戦後日本国際文化交流研究会というグループがあり、1980年代に活発化した地方の国際交流政策とはなんだったのだろうかと議論したことがある。地方は自治省・外務省の上からの施策に従っただけで、予算がなくなったから縮小してしまったとの見方もあるが、NGOやNPOを育て、機能を譲渡していくための過渡期だったという考え方は面白い。きちんと取り組んだ自治体ではネットワークや事業・施設などの形で今に引き継がれている。アジア政策の領域では、環境技術などで国際貢献や協力をしてきた自治体もあるが、文化芸術分野に自治体事務として取り組んだ福岡市の場合、モノを集め人を育ててきて、美術館や映像ホールなどの形として残してきた点で独自性がある。

福岡アジア美術館はその先駆者かつ代表格といえるのではないか。アジア文化賞がアジア研究の学界で定評のあるように、福岡トリエンナーレは世界の美術界で「福岡のアジア」をアピールする機会として定着している。今年の福岡トリエンナーレは全国区のメディア報道が遅れたのは残念だったが、開館10周年にNHK日曜美術館が特集を組み、地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞した。アジア・欧米豪などのアート関係者は誰もが福岡を知っている。最近も国際交流基金が派遣した若手美術関係者によるメコン地域諸国調査の報告会では、“Fukuoka”という名が現地の人々の口にのぼったと福岡アジア美術館の影響力の大きさが指摘されていた。「アジア美術」を通して福岡のブランドは明らかに形成されている。

②「アジア美術」を介した信頼醸成－世界の中の福岡アジア美術館・福岡市の評価

福岡アジア美術館は、アジア２１カ国・地域を対象に活動しており、その地理的範囲は独自の展開をとげてきた。福岡トリエンナーレ前身のアジア美術展は、1970年代後半誰も行ったことのなかった東南アジアや南西アジアの美術界で調査を行い、現地の関係者との信頼関係を培ってきた。オーストラリアの研究者に「アジアでの日本の孤立を福岡が克服した」と言わしめたように、アジア美術展と福岡トリエンナーレはいまだ歴史問題の残るアジアで信頼関係をつくるために本当に気をつけて活動しており、国レベル、政治経済面では一般に関係の遠いところでも一目おかれ、尊敬されている。

日本では「アジア美術」といえば古美術のイメージだが、福岡アジア美術館の地域社会と結びついた“Asian art”（アジア近現代美術）は新しい、生き生きとしたものである。福岡アジア美術館と福岡トリエンナーレには国内外から若手あるいはまだよく知られていないアーティストや研究者が多数招聘され、超国家的かつ多角的な交流が展開されてきた。また、学芸員の調査研究は美術史、文化人類学、地域研究などにわたって超領域的に行われ、展示は一橋大学の社会学者の研究対象になるなど、学際性もある。アジア・ヨーロッパの民族博物館・歴史博物館・美術館の共同企画による2008-09年の「アジアとヨーロッパの肖像」展で、国立民族学博物館、国立国際美術館、神奈川県立近代美術館・歴史博物館とともに福岡アジア美術館が企画・開催館となったのは、収蔵品と企画力の質の高さが評価されたからだ。アジアの美術館ネットワーク形成を目指して昨年国立新美術館で開催されたアジア美術館長会議には、京都国立近代美術館館長とともに福岡アジア美術館顧問が日本代表の報告者として参加す

るなど、同館の重要性は周知の事実である。

③「アジア美術」研究の学術性と創造性の高さ
－福岡アジア美術館・福岡市の個性を生かす道－

福岡アジア美術館が収集・展示活動を通して独自の言説を生んできている点は特筆に価する。地理的範囲もそうだが、現代に連なる系譜として近代の作品を系統的に集めることによって、収集理念を深化させた。フォーク・アートなど「異形」とされてきたものを美術史のなかで位置づけ、価値づけたことも、大きな成果といえる。「アジ美」は既存にないものをやる、学芸課長がまたなにやら面白いことを言っていると、美術界やアート関係者は福岡で出されるものを注視している。実験的で学術的クオリティも高く、一見地味に見えるかもしれないが、発見と定着の幅を着実に広げてきている。

福岡アジア美術館は市立大学ないし「市民大学」的な存在なのかもしれない。国内外のアーティスト・研究者が集まるのみならず、向学心と社会貢献意欲の非常に高いボランティア・スタッフが開館から10年の間に育っており、コアになる観客層もじわじわと拡がっている。市政は集客につながることを期待するだろうが、単純に観客動員数だけでは測れない学術的・創造的な価値がそこにはあるように思われる。

福岡アジア美術館が「極めて画期的で異端」な存在であるというのは間違いない。福岡には「王道」でないもの、「主流」ではないものを流れにのせ、「周辺」のものを「中核」と認識させる力がある。福岡市のような150万都市の美術館には、このような個性が必要であり、生かさないのはもったいない。

④福岡市にとっての「アジア」の力・存在意義・可能性

福岡にとってのアジアを理念面で示す上で、福岡アジア美術館と福岡トリエンナーレの経験は大いに参考になるのではないか。東京や横浜のそれと違い、福岡の「アジア」には近代化以降の日本におけるいわゆる一辺倒のアジアではない面白さがある。市民の温かさや細やかさが伝わるアジアでもある。進藤元市長は一種の大アジア主義を掲げ、桑原元市長と矢野暢特別顧問はアジアと一緒に成長することを目指した。昨年度の中間報告書「福岡市におけるアジア政策の過去・現在・未来　1」には「イメージ戦略としての『アジア』の価値は暴落済み」とあったが、暴落していない他とは異なるアジアが福岡にはあると思う。いま私たちにとってのアジアはこういうもので、私たちはアジアとこんな風に付き合っていくとアジア政策の担当者それぞれが「福岡のアジア」の定義を描き出し、示すべき時期に来ているのではないか。福岡アジア美術館では来訪者に対するもてなしが丁寧できめ細やかなので、アーティストも研究者も観客も喜んで帰っていく。“Asian art”を通して私が感じる福岡のアジアは、脱植民地主義の「心優しき正義の味方」ともいうべき、こじんまりとして温もりがあり、ウィットに富む独特のものだ。

すでに部分的に行われていることかと思うが、福岡トリエンナーレや福岡アジア美術館、アジア・フォーカスや福岡市総合図書館の映像ライブラリーなどに小学校や中学校の授業で必ず行くようにするなど、アジア政策は市民の「アジア」への意識を小

さい時から養うことに活用できる。九州産業大学の学生で、コミュニティのリーダー（博多部の役員）としても活躍している若者が、10年前、小学５年生の授業で福岡アジア美術館が開催したシュ・ビンのワークショップに参加した時のことを鮮明に記憶していると話してくれた。自身はとくに美術好きではないが、今まで見たことのない、ちょっと普通じゃない、体験できて自分で何か作れる、形を崩したような美術館だと認識しているという。このように特に行くわけではなくても存在意義が分かっているという人を育てる施設となればよい。金沢21世紀美術館では、開館時に無料で招待した子どもが牽引力となって親や家族を連れてくる現象が起き、アートを通して市民の感性や創造力を育む装置として機能していると聞く。アジアマンスにしても、助成金のばらまきと取られる面もあろうが、「アジア」に関連させて市民が活動できるという点では可能性もある。自分が住む自治体にはそのような施設や事業はないのでうらやましいと感じる。

⑤「福岡のアジア」を定義する

－福岡市におけるアジア政策のこれから－

「アジアの交流拠点都市」「国際集客文化都市」を目指す政策において、2008年策定の「2011グランドデザイン」（政策推進プラン）では福岡アジア美術館のトリエンナーレが記載すらされていないという。市の位置づけでは同館は市長部局ではなく教育委員会の管轄で局長級を抱える独立性の高さがあるとのことだが、人事交流や他のアジア施策・文化施設との連携は難しいのか。福岡市のアジア政策はそもそも福岡市立美術館のアジア美術展から始まり、進藤市政では政策の中心だったが、桑原市政になって事業が多角化し、その後タコつぼ化したということなのか。

アイデアのひとつではあるが、例えば、「福岡のアジア」を考え、知ってもらうために、アジア政策のインターネット掲示板を作ってみるのはどうだろうか。今ここに誰が来ています、福岡にいたあの人は今こうしています、のような書き込みでいい。そうした来訪・追跡情報などを載せることで、色々な施設にさまざまな人が訪れていることが分かり、さらには市の枠組みを越えて思いがけない協働が生まれることになるかもしれない。

福岡アジア美術館に限っても、これまで事業に関わった人材を卒業生と考えれば、大変な数の同窓生が世界にいることになる。グローバリズム、リージョナリズム、ナショナリズムの複雑に絡み合うアジアで多様なネットワークとフレームワークが拡大・深化するなか、実利とブームに惑わされず、閉塞することなく、創造的な蓄積を外に出しさらに発展させていくことが必要な時代になっている。

（４）地域情報の発信の視点「福岡市のアジア政策に向けた地域コンテンツの構築（並木志乃氏）」

これまで福岡市では姉妹都市交流が活発に展開されてきた。特に、アジアの玄関口として、国際会議の開催をはじめとする交流事業が量と質の両面で進められており、アジアと日本の結節点として道を切り開いてきたといえる。近年、中国や韓国などアジア地域の諸都市は、経済成長と共にそのプレゼンスを高めている。そして、地域の

観光収入や地域活性化に直結するものとして、国際会議や大規模展示会などの誘致合戦は熾烈なものとなっている。観光マーケティングや地域間交流については様々な手法があるであろうが、その都市が選ばれるためには、国際都市としての意義や優位性を明確にできるかどうかに左右されるものである。単に、諸外国から来てもらうという発想ではなく、市民が、アジア政策の趣旨に賛同し、人的な交流のなかから気づきが生まれ、国際交流に関するノウハウや知識の蓄積があるというのは大変重要な要素である。そのためには、諸外国向けへのアピールのみならず、福岡市の市民に対して、これまでのアジア政策の意義と今後の展望を発信することで、アジア政策と市民意識が結びつくことが重要である。

その際に、有効な手立てとして考えられるのは、情報通信の特性を活かし、アジアとのコミュニケーション回路を築くための地域コンテンツの構築であると考えられる。周知のとおり、情報通信のメリットとは、双方向性である。しかしながら、技術的に素晴らしい地域コンテンツが作られても、そこに対話や実社会との適合性がなければ、日々爆発的に増え続けるコンテンツのなかで埋もれるだけである。それにはまず、アジア政策に対する支持や信頼性ある地域コンテンツを発信することで、人々の理解を深め、新たな関係性を橋渡しできるものになると考えられる。

日本各地の地域情報化研究や自らのフィールドワークを通して見受けられてきたことは、地域の内外に対して、地域の魅力を発信したいという欲求や日々の出来事の記録を次世代に残したいという願いを持っている地域住民が少なからず存在するということである。本来ならば、こうした市民の関与を、地域連携や諸都市との交流に活かすことが、地域情報化政策のなかで求められていたはずである。しかしながら、中央政府から役所の中までは地域情報化政策が行き届いても、市民生活にはさほど密着しておらず、地域の活性化には到達していないのがほとんどである。こうしたことには、依然として一方通行の視点から脱却できていないまま、次々に新たな情報システムが発注・提供され、そのなかで、市民参画による地域の個性の発揮というものが、極めて限定的に位置づけられてきたことが背景にあると考えられる。

コンテンツの構築には、福岡市のアジア政策の特徴となりうる地域コンテンツの掘り起こしが、どの程度できるかにかかってくるだろう。そして福岡市ならではの地域コンテンツの構築を進めるにあたっては、過去の情報の再編集が特に重要な意味を持ってくる。具体的には、福岡市で過去に行われてきたアジア政策を体系的に整理するところから始まるといえる。既に、地域メディアの映像番組や記事、市役所の基礎データ、シンクタンクの調査結果、国際会議での交流事業の成果物、市民からの政策提言など、非常に多くの福岡市に関する情報やコンテンツが蓄積されていると思われる。しかしながら、メディアや事業主体別に整理・保存されていても、現実に利活用しにくいため、関係者のみが個別に知るだけで、アジア政策の全体像が見えにくくなってしまう可能性がある。従って、表現方法は多様にあるであろうが、各アジア政策の関連づけや関連事業の波及効果について、量的・質的側面、二次元・三次元など多面的な視点からまとめていくことが必要である。

こうしたコンテンツの掘り起こし作業は、まず、整理するだけで数ヶ月はかかるものである。それに加えて、コンテンツ構築を事業化するのであれば、基礎調査やヒア

リングなども含めると半年から一年を要するものであるだろう。そして、コンテンツづくりのプロセスには、専門家の視点のみならず、市民も関わることが大変重要である。編集作業は、様々な資料や文書などをもとに、映像や音声などに対して検索キーワードをつけることや内容を関連付けるということである。また、不足しているものがあれば、新たに取材や調査をすることもあるだろう。そのため、土地勘や地域人材などに対する豊富な知識や地域との密着性が必須であり、地元に詳しい市民の雇用も必要になってくるだろう。例えば、これまで行ってきた地域メディアやコンテンツに対する評価の研究から明らかになっているのは、地元の催事を定点観測したもの、市民目線で捉えた日常的な風景や地域人材に関する映像が意外と数少ないということである。こうしたことに市民自身が気づき、日常では見えてこなかった地域の価値を知ることで、市民主体の地域メディアの制作が行われていくきっかけになっている。また、過去の記録映像や音声などが各家庭に眠ったままになっていることもあり、機械の不備やメディアの保存状態によって個人では再生が難しい貴重な資料なども多々ある。こうした蓄積を再編集し、地域コンテンツとして公開することで、様々な場面での活用価値も高まり、地域に対する意識の涵養にもつながっている。

以上述べてきたことは、アジア政策に対する再編集を通じて、地域を相対化することになるといえる。このことは、地域のコミュニケーション回路を開き、地域内外のイメージ・ギャップを埋めることにもなるであろう。手軽に行うことができるようになった情報発信や都市のアピールは、一体何のために行うものなのか、誰に伝えるものなのか、といった基本的な目的を明らかにすることに立ち返らざるを得ないと思われる。特に、「アジアに対して」という方向性が明確に定まっているのならば、それに特化したコンテンツの構築が必要である。アジアのなかでの福岡市の位置づけと魅力について、市民のあいだでどのような認識がなされているかを確認することは、福岡市の特徴は何かを再発見する機会にもなる。これまで福岡市で行われてきた都市会議や交流事業の成果を、地域の伝統や教育などと結びつけていくことでアジア政策の広がりが生まれてくると思われる。

（５）都市デザインの視点「戦略的コミュニケーションの勧め（伊藤香織氏）」

①福岡の強みと課題

所用で幾度か訪れて知る限りでも、福岡は魅力的な都市である。コンパクトで街らしい賑やかさがあり、食事がおいしく、人々はフレンドリーだという印象がある。今回、本研究に間接的に関わらせていただくなかで、新たに二つの強みを知ることができた。ひとつは人々のまちに対する愛着の強さ、もうひとつはアジア文化資産の蓄積である。

「シビックプライド勉強会」（2009 年 3 月 16 日）に講師として参加し、ワークショップ形式で市民参加者の話を聞かせていただくと、ほとんどの参加者が福岡への強い愛着をもち、福岡に住むことに大きな満足感を感じていることがわかった。また、いくつかの組織を訪問して話を聞かせていただき、また中間報告書を通して、アジア太平洋こども会議・イン福岡、福岡アジア美術館、アジアの映像アーカイブなど、特に文化芸術面においてアジアを統合するような資産の蓄積があることを知った。

しかし、福岡が国内外での競争力を強化していこうとするならば、そこには課題もある。前述したようなポテンシャルを都市の力にできていないことである。市民は愛着のもてる福岡に満足しているが、仲間内に閉じやすく必ずしもその先のアクションに結びついているとは言えない。アジア文化資産については、適切な評価と周知のプロセスを欠いており、ただ蓄積されていくだけでは惜しい。

②シビックプライドとは

シビックプライド（civic pride）という言葉がある。市民の都市に対する愛着や自負という意味で、「この場所をより良くするために自分自身がかかわっている」というある種の当事者意識を伴う。郷土愛がシビックプライドの大きな源泉のひとつであることは確かだが、郷土愛そのものとは若干ニュアンスが異なる。ただ「好き」で終わるのではなく、その先のアクションにつながっていくものだ。シビックプライドは、自分の人生と都市との関係において、個々人が自発的に創意を発揮する原動力になるものである。そのようにまちの隅々から満ちていく前向きで建設的な“気分”は、来街者や中短期滞在者にも波及する。人は、風景やモノを介する以上に人を介して都市に接する。市民一人ひとりのシビックプライドを醸成していくことは、国内外の人々に福岡というまちに対する親近感、共感、憧れをもってもらうことにもつながっていく。都市のプレゼンスを高めるプロモーションに厚みをもたせるためには、シビックプライドに裏打ちされた市民レベルの振る舞いの意義は大きい。

一方で、シビックプライドが醸成されるためには、都市に対するある程度のリテラシーが必要である。都市に関心をもち理解を深めていかなければ、シビックプライドには結びつきがたいからだ。また、他者の評価がシビックプライドに結びつくこともある。都市内部では当然のこととして気付かなかった長所を外部の他者の目を通して認識できることは少なくない。だから、他者の声に耳を傾ける開かれた態度も必要だ。

③戦略的コミュニケーション

シビックプライドを醸成し、都市の力にしていくために、コミュニケーションが重要な役割を果たす。一般的な広報が「発信」（発するところまで）に留まるのに対し、ここでコミュニケーションとは、誰に・何を・どのように「届ける」（相手が受け取るところまで）かをマネジメントし、実施することである。そのためには、マーケティング（誰に・何を）と、デザイニング（どのように）が必要である。

まちのもつ多様な資産も、それぞれ誰をターゲットにして関心を喚起するべきかが異なる。アジア現代美術やアジアの映像アーカイブであれば、広く一般受けを期待するより、まずはごく限られた層でも、世界中のアジア文化研究者や学生、美術愛好家に知ってもらう必要があるだろう。そうした人々の評価を通して認識されるまちの誇りもある。一方、アジア太平洋こども会議・イン福岡であれば、広く市民レベルでより身近なものになるよう浸透を目指すべきだろう。

たとえば、人口 19 万人のオーストリア・リンツは、一般にはそれほど知られてはいないが、デジタルアートにかかわる層には世界中で絶大な知名度を誇る。アルス・エレクトロニカ・センターには世界各地からのアーティストや研究者が滞在しており、

毎年9月の祭典では、この小さなまちは世界中の関係者が集まる一種のサロンになる。

長野県松本市では、毎年開催されているサイトウ・キネン・フェスティバルの期間、世界各地から集まった音楽家や演奏を聴きに来る音楽愛好家が滞在する。フェスティバルを中心とする音楽の取り組みは広く市民に愛されており、まちかどの小さなレストランで北米の音楽家が顔なじみの店主と英語で談笑する姿が見られるなど、国際的な音楽の拠点としての交流をまちの人々が支えている。

コミュニケーションのデザイニングに際しては、単にパンフレットやキャッチフレーズやキャラクターをつくることが目的になりがちだが、「誰に・何を」に応じて多様なコミュニケーション媒体を適切に編集する必要がある。特に空間に表れることと人を育てることとには留意すべきだ。空間や人は、日々の生活のなかで触れたり直接的に交流して、自ずと人々の知識・心持ち・振る舞いに影響する媒体と捉えられる。前述の二例では、アルス・エレクトロニカ・センターやまつもと市民芸術館のような建築として、世界各地からの来訪者が街を行き交い街角で談笑する様子として、イベントや出来事を知らせるポスターやバナーとして、都市空間に表出する。また、アルス・エレクトロニカ・センターがアーティストを育てることで世界中にリンツの唱道者を送り出しており、音楽を通した広い社会教育に力を注いできたことで誇りと親しみを持って来訪者を迎えることのできる松本の人々のリテラシーが育てられたとも言える。

④コミュニケーション戦略組織の提案

ここで、市役所内にコミュニケーション戦略のための組織を設置することを提案する。福岡をプロモートするための対外的なコミュニケーション、シビックプライドを醸成するための市民とのコミュニケーション、そして市役所内のコミュニケーションを担う。まず市職員自身がシビックプライドをもち、部署の枠を超えて福岡のもつ資産の価値や課題に関する知識を共有していかなければ、市民に呼びかけることなどできない。また、コミュニケーションとは双方向であるから、福岡に関わる様々な人や組織の言葉に耳を傾けることも任務の一環だ。

そうした組織の例として、海外の二都市を紹介する。スペイン・バルセロナはもともとシビックプライドの強い土地柄ではあるが、市役所の「コミュニケーション及びクオリティ局」(市民とのコミュニケーション、市のコーポレート・アイデンティティ、マーケティングをコントロールする部署）がリードして、市のプロジェクトやサービスを市民の気持ちに届け、また市民のシビックプライドを可視化して都市のアイデンティティとプレゼンスを強化している。

一方、オランダ・アムステルダムでは、都市をプロモートするという共通の目的の下に行政・民間企業・市内各地区・公益法人等機関が連携して、プロモーション計画を策定、実施するアムステルダム・パートナーズを組織している。徹底したマーケティングでアムステルダムの強みや課題、方向性などを分析し、アムステルダムの「人」を中心としたプロモーションを展開する。

このように、行政の中に設けられる場合もあれば、広くパートナーシップとして設けられる場合もある。いずれにしても、部署や組織を横断し、多様な政策を概観しながら戦略を立てる広い視野と編集能力が必要だ。そうした試みのなかで、都市のアイ

デンティティに形を与えてゆき、政策へのフィードバックをしていくことも可能だろう。

福岡が、まちのもつポテンシャルを適切に評価し強化するとともに、まちの人々のシビックプライドを結集して都市の力にしていけることを期待している。

2）アジアの専門家からの提言

（1）ソウル・国際連携ネットワークの視点「福岡市アジア政策への提言（梁起豪氏）」

＊本提言は当研究担当者のインタビューによる。

①福岡市のアジア政策について

●福岡は良い都市だがイメージが弱い

福岡のこれまでの国際関係の施策の歴史と蓄積には圧倒される思いがある。だが、福岡は良い都市と思うがイメージが弱い。ソウルは東京・大阪、譲って名古屋までしか目線が行かない。釜山にとって福岡は経済力があるパートナーとして重要な存在だが、韓国では、福岡は地方都市と認識されており、アジアの福岡と言うことにもピンと来ない。個人的な印象でも、福岡がグローバル都市とは思えない。中国人や韓国人が出入りしているので、初めて行く前までは国際多文化都市と思っていたが、実際は違った。多文化人口が少ない。韓国語もだが英語が使えないとグローバル都市とは言えない。また、福岡の中にアジアが見えてこない。

福岡はどんな都市を目指しているのかがわからない。ソウルで福岡の都市広告を見たことがない。ソウルでは福岡より、湯布院の方が知られている。福岡と釜山が圏域を形成するのはいいのだが、イメージの限界を感じる。それを超えた普遍的なものが必要であり、そのためにもシンボルを作らないといけないと思う。日韓の海底トンネルの可能性などを生かしたアジアのなかの福岡を考えていったほうがいいのではないか。

福岡と交流して何がいいことがあるのかというものが、韓国の都市には見えてこない。市場のゲーム論理が働くところ、お互いの需要がない限りは上手くいかないものだ。それが何かを見つけるのが福岡の役目と思う。

●福岡のアジアはよい視点だが、具体的なインセンティブが見えない

福岡がアジアを向くという戦略を持ったことは良いと思う。韓国としては釜山と福岡が上手くやればいいじゃないかと考える。ソウルや北京は福岡の相手になれない。仁川は大阪か横浜とやらないといけないと思っていたが、横浜は仁川を受け入れなかったようだ。

韓国はアジアというものに特別な関心はない。アジアの再発見は学問的には興味関心をもたれているが、韓国は、グローバルと中国に目が向いている。韓国は中国人をアメリカ人と同じぐらい大事にしないといけないと考えている。中国では青島に 70 万人の韓国人が住んでいる。韓国人向けのインセンティブが高いので、韓国の中国投資の 7 割は青島である。このようなインセンティブが福岡にあるだろうか。

福岡に海外企業が来るときにインセンティブがあるのか。小泉政権の時に特区ができたが、上手くいっているのか。グローバル化と中国重視が広がる中、日本の比

重が低くなってきている。韓国から見た福岡の魅力がなくなっている。現状の福岡の限界を前提として、欲張らずに何をすべきか考えていく必要があると思う。

韓国、中国の人はことさらアジアを強調して言わない。福岡の場合は、大陸からちょっと距離があるので、一緒になりたいからアジアを強調したいという思いがあるのだろう。しかし、韓国にとって、日本がアジアと言う場合、やはり歴史の清算というところに思考が戻る。戦争がアジアの歴史の出発点になっている。福岡はそういうことを研究している学者もあまりいない。日本がアジアを発信しようとすれば、韓国人、中国人はまず「歴史はどうなったのか？」と聞きたくなる。ただ、福岡は隣国と離れているが、一体感があると感じている。新潟県も北東アジアとの交流に力を注ぎ、うまく行っていった時期があったが続かなかった。その点、福岡はこれまで続いているのだから上手くいっていると言える。こういった失敗事例、成功事例の整理も必要だ。

②韓国都市の国際政策について

●韓国では下からの国際政策は弱いが、上からのグローバル政策は強い

韓国では 15 年前から地方の国際化への取り組みが始まった。だが、今はそれが歪曲化されてしまった感があるし、縮小傾向にあると言える。取り組み当初は、都市そのものを国際化し、都市の競争力を高めるという目的で始まったのだが、近年は中小企業の通商支援、輸出支援が中心になってしまい、欧米のように人権や平和を掲げ、開発途上国の支援等に取りくむ姿勢は置き去りにされた。そして 2010 年 1 月に日本の自治体国際協会(CLAIR)にあたる韓国地方自治団体国際化協会(KLAFIL)が職員数 50 名ぐらいの組織だったにもかかわらず解散させられ、全国市道知事協議会に統合されたことによって、自治体の国際化の取り組みの縮小に拍車がかかってしまった。

しかしながら、1995 年以降、各都市に国際協力室を設置するなどして、政府が力を入れ始めた地方の国際化は、2000 年には結果が現れ始めていたのも事実である。韓国の首長は、国際化に関心がなくても、グローバルに都市を発信したいと思っている。日本や福岡を見ないでグローバル都市を見ている。したがってグローバルな国際機構に興味を持ち政策を展開してきた例が多く見られる。例えば、テグ、インチョンは UCLG-ASPAC、プサンは TPO、デジョンは WTA など国際機構との連携や国際機構化を目指す傾向がある。このような国際機構との関係深化や国際機構としての認知度の高まりなどは成果と言える。この方向性は、日本の都市にはあまり見られない。逆に、日本と一緒にやっている機構はなかなかうまくいっていない。たとえば浦項市は新潟と一緒に国際ネットワークを運営しているが、新潟はお金がない人がないと言う理由で、参加にあまり積極的ではない。おかげで、浦項の活動は機能していない。日本の都市は国際機構づくりには消極的である。その点、韓国の都市がイニシアティブをとってやってきていることの評価はしたい。

韓国で地方の国際交流政策が下火となってしまったのは、なぜ国際交流をしないといけないかという理論が弱かった。グローバル都市をつくる、その重要性の理論付けが必要である。アジアの時代、海洋の時代、交流の時代には、大切なことであ

る。しかし、行政学で地方の国際交流を研究している学者が韓国にはいない。専門にしている学者がいないという現実がある。

韓国の場合、国際化には成功したが、国際化政策には失敗したと言わざるを得ない。国際化の多様な面を把握していない。外部の上からのビジョンをコピーしただけで、内部から下からの自発ビジョンが作られなかった。このような国際化政策で、仁川、釜山などうまくいっている都市例もあるが、ほとんどが失敗してしまっている。

今の韓国は大統領がグローバル都市政策に力を入れているから、自治体でもそのような動きが見られる。しかし、それは地方から生まれたものではない。中国にはグローバル企業が数多くあるし、国連機構も多い。韓国にはそれがない。ソウルにはちゃんとした国連機構がない。唯一ある国連移住機構は、頼んで来て頂いた、あまり実態がない小さな事務所だけだ。国連機構がない都市はグローバル都市と言えないと思う。そういう意味ではソウルはだめだ。まだ仁川や釜山の方が開かれている。

●韓国都市アジアよりもグローバルを目指している

韓国では地方の国際化といえばグローバル化を考える。内容は中国やロシアが市場をリードしているので、対アジアが多いが、韓国ではアジアをあまり意識していない。

自治体の国際化政策に関しては、企業がリードして、自治体が追従する形が多く、首長の交代によって、ある面では高まり、ある面では衰退する傾向がある。例えば、ソウルの国際化は貧弱である。６月２日に総選挙があるが、現在のソウル市長は、あまり国際交流に熱心ではない。ハンガンルネッサンスなどのプロジェクトを通じて、グローバル都市化を進めていくことには高い関心を寄せているが、国際交流という発想で進めているわけではない。

今、韓国の都市は空港、コンベンションセンター、ホテルを競ってつくっている。国際化機能は充実していく方向にあるが、コンベンションセンターは過剰気味である。例えば、済州は２、３施設抱えている。

日本は、地方活性化のために国内に 99 の空港をつくったが、現在上手くいっていないところが多い。空港に関しては、日韓の航空路線は 26 もあり、そのほとんどがソウル、釜山、済州に飛んでいる。日本との路線は多すぎるが、一方で、光州の国際空港は、中国との路線しかない。140 万都市なのに日本との直行便はひとつもない。日本路線をつくるべきと考える。韓国にも新たに国際空港が３、４つ新設されたが、ほとんどが赤字である。

コンベンションセンターも同様の状況にあり。16 地方都市に１つずつある。多くの首長は、コンベンションセンター、ホテルがないとグローバル都市とは言えないと考えており国際都市の必須条件と考えられているのでこのような状況になってしまった。しかも、地方は計画をつくれば、国からお金が入ってくるので、コンベンションセンターをどんどんつくってきた。だから、ミスマッチがおきている。韓国は 230 の都市があるが、祭りが 600 もある。しかも秋と春に集中している。コン

ベンションも、学会も季節が集中するので、誘致合戦が起こっている。MICE 産業に関していえばソウルの強さが際立っている。済州では観光客が減ってきており、外資、外からの人の誘致が首長の益々重要な役割となってきている。そういった面からも、ハコモノの建設には慎重にならねばならないにもかかわらず、地方都市のインフラはまだ弱いので、韓国はこれからもハコモノをつくっていかねばならない。ハコモノはソウル、釜山、済州に集中している。それ以外の農村のインフラは特に弱い。10 年前に比べ、道路はよくなってきているが、韓国ではまだハード面の整備が必要である。

●都市・地域間競争を意識した超広域圏形成の取り組みが活発化している

地方の国際化の流れの中で、韓国は超広域圏への関心を高めている。グランパリや大ロンドンなどのようにビジョンを持って都市圏を形成した例を見習い、16 ある市道を７つに減らしメガポリスを形成し、競争力を高めていきたいと考えている。世界は新しい中世になりつつあるので、国際的な地域競争に生き残っていくためには必要なことだと思う。福岡も体を大きくして都市圏単位で地方同士のローカルなところと付き合っていくべきと考える。具体的には上海、釜山がやはり有力だ。

2007 年に仁川発展研究院が韓国と中国都市の国際競争力について研究し、国際化指数のランキングを公表した。それによれば、ソウルは大連や広州よりも順位が下である。これは危機的な状況と捉えてよい。この結果を踏まえた上で、現ソウル市長はグローバル都市化を目指し、英語教育などに力を入れてきている。

蔚山と慶尚南道のプロジェクトに参加する機会を得ているが、どちらの地域もがんばっているものの、慶尚南道と釜山、蔚山と釜山という関係がなかなか生まれないことを残念に思っている。やはり自治体の壁は大きい。福岡と北九州の関係に似ている。両方が１つになって広域の協議会をつくろうとする時に壁が存在する。

韓国地方都市では都市の合併が進み、都市の広域化が進んでいる。馬山、鎮海、昌原が合併すると、釜山と対抗できるようになる。そうなると、この地域と釜山の協議会をつくることがもっと難しくなってしまう。合併しないまま協力関係をつくることも難しい。韓国では、行政体制解体を進めようと努力している。基礎自治体（市、郡、区）を無くし、都市だけにしていこうと言う計画だったが、500 年以上の歴史がある仕組みを解体することは難しく、ひとつの政権で達成するのは難しい。成功したのは２都市だけであり、その他のところでは市民の反対が起こり、失敗してしまった。

日本の市町村合併は、主として経費削減を目的として推進されているが、韓国は戦略的な合併を念頭においている。統合した結果、都市の財政が削減されたかというとそうでもない。実は増えたところもある。合併で経費削減はなかなか達成されない。都市再編問題で、現在の最大焦点は首都移転である。しかし、それはありえないと思っている。今の政府はやらないだろう。

③福岡に対する提言

●福岡・釜山は海洋戦略を取り入れるべき

釜山大学のイ先生の論文によれば。中国では、大陸文明（行政文化)、海洋文明（商人文化）が交互に栄えてきた。そして今、海洋文明の時代に来ていると言う。振返れば、北東アジアにはこれまで海洋文明がなかった。韓国にも海洋文明がなかった。海軍にしても韓国には沿岸海軍しかない。大洋海軍がない。世界の大造船所のなかで７つが韓国にあるというのにである。グローバルで活動する海軍のように、これからの韓国、そして釜山、福岡は海洋戦略を取り入れていくべきである。釜山と福岡は、海洋戦略があってこそ目立つ存在となる。

●「福岡・アジア学」を編纂し都市発展の理論付けを行うべし

ヨーロッパに比べるとアジアの都市は弱い。ヨーロッパは都市から発展して国となった地域だ。ハンザ同盟などの都市連携から発展し力を持つようになった。そういう意味では、韓国の都市にはもともと限界がある。ただ、日本の場合は、福岡も大阪など江戸時代以前から発展してきた都市の歴史をいかして発揮できるパワーがあるはずだ。そういった意味でも地域学は重要である。

福岡には、福岡学などといった都市学はあるか。環日本海研究には 10 冊の報告書がある。福岡も日韓、あるいは福岡とアジアとの関係に焦点を当て、10 冊ぐらいの報告書をつくってみてはどうだろうか。そしてリレーセミナーを３年から５年間やってみる。アジアは圧縮成長せずにおられない状況にあり、韓国もそうしてきた。全く知られていない国家や都市や人民を目立たせるためには、地味なものでは駄目、100 階建てのビルなど、シンボルとなるような目立つものをつくってきた。その点、都市の発展の理論付け、成長の理論付けが行われてこなかった。

福岡はなぜ今あるのか、福岡という都市がどういう経緯で今日に至ったのかを、きちんと歴史的に整理し、理論付けした形で見せていくことは大切なことだと考える。その場合には、単なる市史にとどまってはいけない。少なくとも県単位の歴史が必要であり、地域の特殊性、普遍性を踏まえた上での、これから進んでいくための方向性が必要となる。このような取り組みは、金沢、横浜がうまくやってきている。韓国も 10 年ほど前から取りくむところが増えてきた。

●アジアのグローバル都市を目指すべし

福岡はローカルでやるのもいいが、大連のようにグローバルでやってみることも必要だと思う。済州は自治体を１つにした。そのことによって、かなりの権限が許されるようになった。福岡も済州みたいに、アジアのグローバル都市として法的な緩和を進め、自由な都市にしてはどうか。そのような実験をしたほうがよい。

しかし、英語が通じないというのは、中国人、韓国人からすれば、「ちょっとこれは・・・」と思う。香港では洗濯屋の 70 代のおばあさんでも英語が話せる。治安も良い、食べ物おいしい、エンターテイメントもある。全く不自由を感じない。安全で、資本主義があり、見物するものも沢山ある。シンガポールにはナイトサファリのような夜の楽しみもある。福岡の夜はどうだろうか。ソウルにはナイトライフがない。英語環境に加え、遊び、気楽さ、楽しさなどの研究も必要だ。リラックスしたものがないといけない。加えて、福岡の駅前で車を借りたことがあるが、日

本語ができ国際免許証を提示しているにもかかわらず、貸すのをかなり渋られた経験がある。結局、在福韓国人にたのんでやっと借りることができた。大きな越えるべき心理的なハードルがあるように思われる。

香港、シンガポール、シドニーは多文化社会が形成されており外国人が動きやすい。これがグローバル都市だと思う。シドニーはグローバル都市のナンバー１か２である。例えば、ロンドンからは直行で行けないような、有力都市から離れている奥地のようなところなのに、移民、英語、多文化、国際機構、グローバル企業の蓄積がある。

このような真のグローバル都市を思い切って福岡は目指してみるべきと考える。

（２）北京・都市デザインの視点「福岡市アジア政策への提言（肖渓氏)」

＊本提言は当研究担当者のインタビューによる。

①福岡市に着目する理由

中国における都市の人間居住環境の向上を推進する研究と事業を行っている。福岡のことは、2000 年に国連を通じて国連ハビタットのことを聞き、ハビタットの事務所が福岡にあることも知った。当時、中国建設部では中国の都市建設に参考となるような住みよい都市について研究していた。その一環として、人間居住賞（国連ハビタット賞）受賞都市のことを調べたのだが、調査の中で福岡が非常に早い時期に国連ハビタット賞を受賞していることを知った（これは誤解のようである)。福岡には国連ハビタットのアジア太平洋事務所が設置されていることもあり、福岡市に関心を持ち、行ってみたいと思うようになった。

中国人にとって国連の賞はなかなかもらえない価値ある賞である。市民生活の向上に貢献する都市として、国際的に認められることは都市にとって大変名誉なことである。中国の威海市は 2003 年に同賞受賞を契機として翌年から毎年、地域文化の発信やハビタット理念のＰＲなどのために中国威海ハビタット祭りを開催し始めた。このフェスティバルには国連行政の幹部や国家のトップ官僚が招かれる。それは、同市を国内外にアピールするためであるとともに、高級幹部が市に集まる賞であることを市民に宣伝することによって、住みやすい都市としての認識と誇りを高める効果を狙っている。中国はとても広いので、私のような南の出身者は威海など北の都市のことは聞いたこともなかったが、このフェスティバルを通じて威海のことを知った。威海は国内での知名度を上げただけでなく、海岸生活にあこがれる多くの中国人のあこがれの土地になり、威海で家を買う人が増加した。威海政府は、このような動きを受けてさらに都市建設に力を入れ、もっと住みやすい都市にしようと努力した結果、益々威海に引っ越す人が増え、土地の値段も不動産価値も上がって行った。このような都市建設の好循環を生み出すきっかけとなったのが国連ハビタット賞の受賞である。

福岡のような住みやすい都市の都市開発の経験は、アジア太平洋地域で広げていけると思う。中国の都市の大きな参考になる。福岡にとって国連ハビタットは大きな点だと思う。中国では福岡のことはコンパクトシティとして宣伝していきたいと考えている。福岡は国連ハビタットを通して、人的ネットワークを活用しながら、一緒に福岡は住みやすいという PR をしていくべきと思う。福岡式の住みやすい都市づくりを一

冊の都市デザインの本にまとめ、いかに計画し、政策として実施してきたのか、だからこういう住みやすい都市になりました、とPRした方が良いと思う。福岡は80年代から大きく発展した都市と認識している。福岡スタイルはとても価値がある。国連ハビタットの野田本部長は、福岡スタイルの中国での推進を積極的にとらえている。中国には福岡と同サイズの都市が沢山あるからだ。

②アジア政策の評価

福岡市のアジア政策は大変興味深い。国連ハビタットが福岡に事務所を開設したのは、このようなアジア関連の事業を早くから展開してきたからだと思う。アジアを標榜した時期と福岡が発展していった時期は重なっている。住みやすい都市として評価が高まった今、福岡の次の仕事は、アジア太平洋地域の人々に福岡スタイルの都市づくり手法（都市計画・実施・管理・監督）を知ってもらうことだ。そのためには、まずは福岡に来ていただける方策を考えねばならない。

20年のアジア政策を見てみると、文化芸術の活動が多いとの印象を受ける。中国では文化は舞台で役者が経済活動するという言い方をする。文化活動をデパートのショーウインドウに見立てると。ショーウインドウがきれいだと人が皆集まる。そうすると経済活動が始まる。そしてさらに文化に投資が行われるようになる。

③福岡市に対する提言

広州市の「広友会」は参考になると思う。世界中からお客様を招くフェスティバルを開いている。大きなお金を入れて、ホテル、デパート、美術館への集客を支援し、経済活性につなげている。広州には昨年大きな国際会議場ができた。設備も良い素晴らしい施設である。福岡市にも素晴らしい国際会議場があるので福岡ならではの、世界中から人が来るような国際会議やフェスティバルをすればよいと思う。展示だけでなく、経済共同活動をする場にし、ビジネスチャンスを見いだせる場にしたらよい。

福岡は住みやすい都市であり、国連ハビタットの事務所を持っている。一緒にアピールすることも大切だが、関連して、アジア太平洋都市建設フェスティバルやアジア太平洋都市環境フェスティバルを開催し、福岡という都市をどういう風につくってきたのか、どのような経験してきたのかを、アジア太平洋のビジネスマンにビジネスチャンスとして提供してはどうか。この場合、国連ハビタットと組むことはとても重要なことだ。国連の名前がつくと、中国の反応は2段階上がる。普通の都市交流活動が、国連の名前があれば、国際的な活動になる。福岡が国連の会議への招聘などを断わることがあることを聞いて、非常にびっくりした。もったいないと思う。

文化を舞台にした経済活動に関して、福岡が20年前に開催したアジア太平洋フェスティバルは経済活動につなげた成功例だと思うが、世界中から人が来るようなフェスティバルではなかった。今ではもうあの規模のイベントは開催できない。と諦めるのではなく、アイランドシティ（IC）で開催した緑化フェアも素晴らしかったと聞いているので、ICも活かしながら福岡ならではのフェスティバルを何かしらやってみてはどうか。アジア太平洋人間居住フェスティバルというのはどうだろう。

中国の都市が開催するイベントは、参加者からお金をもらうのが基本で、行政はあ

まり出さない。その辺の方法を「広友会」から教わったらどうだろうか。姉妹都市にはどっちが上というものはない。広州市はどんどん大きくなっている。福岡からいろんなことを学んできたが、今では広州から福岡が学ぶことも多いと思う。提携する都市や友好都市からもっと学びあうべきだと思う。中国の政府は、イベントの開催はサービスを提供する団体に委託する。政府が直接事業をすることはない。政府の趣旨を理解したプロを雇う。政府⇔NPO⇔企業という、連携で進める。

福岡国際映画祭のことは全く知らなかった。映画祭をやっているなら映画を切り口に福岡市のＰＲをしてはどうだろうか。今、中国では、東京大阪よりも北海道が人気を集めているが、これは北海道の釧路を舞台にした大ブレイクの映画の宣伝効果である。昨年九州一周してみたが、九州にはきれいなところがたくさんある。九州のことを知れば中国人は行きたいと思うはずだ。アジア文化賞受賞者の張芸謀氏に撮ってもらってはどうか。また、福岡は漢字を見ると縁起がいいので歌にするのも良いと思う。中国人はカラオケでよく「広島恋歌」を歌う。とても良い歌なので中国人は広島に良い印象を抱いている。また「長崎はいつも雨だった」も人気だ。アジア文化賞受賞者に映画、歌、小説で福岡のことを取り上げてもらえれば効果が大きくなる。また写真集の舞台でも良い。中国の人気女優である袁泉さんが沖縄で撮った写真集を発売すると、中国の若者の中で沖縄ブームが起こった。北京オリンピックで金メダルを取った女子の飛び込み選手は美人アスリートとして大変人気である。彼女は初めての世界タイトルを福岡で開催された世界水泳で獲得した。そういう縁を活かし、写真集を福岡で撮ってもらうよう提案しても良いのではないか。

日中韓首脳会議が九州国立博物館で開催されたことによって、中国での福岡の知名度はかなり向上した。政治的な動きも含め、経済、スポーツ、芸術などあらゆる分野を活用して、福岡のことを伝えていくような情報の発信が大切であると思う。

２．都市フォーラムでの公開討論

１）フォーラム概要

（１）タイトル

（財）福岡アジア都市研究所 第３回都市セミナー

フォーラム「福岡市におけるアジア政策の未来」

－福岡女子×東京女子が考える「福岡でアジアを活かす・活きる道」－

（２）概要

①構成

１部：ＵＲＣ自主研究報告

山下永子（福岡アジア都市研究所研究主査）

２部：福岡への提言

岸清香（都留文科大学講師）

並木志乃（東京大学大学院情報学環交流研究員）

伊藤香織（東京理科大学准教授）

３部：対談+質疑応答

モデレータ

山下永子（福岡アジア都市研究所研究主査）

ディスカッサント

【福岡女子】

佐々木喜美代（福岡市広報課長）

帆足千恵（福岡観光コンベンションビューロー広報係長）

【東京女子】

２部の提言者

②開催日時・場所

2010 年３月 30 日（火）14：30～１７：00

福岡ビル大ホール

③参加者数

120 名

④企画意図・主旨

2008 年～2009 年度、ＵＲＣは、福岡市の 20 年以上のアジアに焦点を当てた施策「アジア政策」の成果を検証する研究を行った。長期にわたる継続的な取り組みは、大きなネットワークや資産を形成したはずであり、それが、今日の世界的な都市・地域間競争社会にあって、福岡が地域の個性や魅力として世界に対してアピールできるものになっていると考えたからだ。

そして、本研究によって、福岡には多数の貴重なアジアの創造的な知の財産、重層的な人のネットワークが蓄積されていることがわかった。しかしながら、それらが十分に活用されていないし、またそれ以前に市民のみならず対外的に知られていないということも同時に明らかになった。

本フォーラムは、「アジア政策の資産を活かしていくために、私達はどうしていったらよいのか」ということをテーマに３部構成で開催された。１部ではまずＵＲＣからの研究結果の報告を行った。それを受けて、２部では、研究を通じて知己を得た３人の若手新進女性の研究者に、それぞれの専門の立場（岸先生：国際文化交流・美術、並木先生：情報、伊藤先生：都市計画）と、「東京女子」の視点から具体的な提言をいただいた。そして３部では、福岡市がその提言を、今後の施策に反映していくために、市の広報、集客交流戦略を担当する２名の女性「福岡女子」を加え、オープンな雰囲気での対談・議論を行った。

この一連のプロセスを通じて、会場全体で福岡市のアジア政策の活かし方を検討する雰囲気を作り出し、実際に展開可能な提言やプログラムが作り出されていくきっかけになることを期待してこのような構成で進められた。

なお、今回、「東京女子」「福岡女子」というちょっと誤解を招きやすい、センセーショナルな言葉をあえて使ったのは、新たなムーブメントを起こしたいという意図が背景にあったからだ。これまでのまちづくり論議が男性中心に進められ、まちの消費の主要な担い手であり、まちのヘビーユーザーである女性の意見があまり反映されずにきていたのではないか、今後は、もっと女性にまちづくりに関心を持ってもらって、参画してもらいたい。そういう思いもあり、女性が興味をもって参加しやすいようなタイトルをつけた次第である。

おかげさまで通常の都市セミナーよりも女性、特に若い年代の女性に多く来場いただくことができた。今後も、あらゆる層、老若男女がまちづくりに興味を持ってもらえるような都市セミナーを開催していきたいものである。

２）フォーラム骨子（発言要旨）

（１）１部・２部

１部は本報告書の概略説明、２部は資料編１に掲載の岸氏、並木氏、伊藤氏からの提言報告であるので、ここでは割愛する。

（２）３部の発言要旨（敬称略）

山下　早速だが、３人の先生方の提案を受けて、福岡市で取り組んでいること、またこれからの取り組みなどについて、福岡市の広報と集客交流の実務的立場から、佐々木さんと帆足さんに、続けてお話を頂きたい。

佐々木　３人の先生方の意見を聞きながら、あらためて博多の人間は博多が好きすぎて自分のことがよくわからない状態になっていると思った。博多の人間は、福岡を訪れた人に「よかろうが」と言い、食べ物を食べさせては「おいしかろうが」と自ら言っているようなところがある。

福岡市はアジアとの交流の歴史が、金印等に見られるように形として、跡が残っている都市。金印、鴻臚館、承天寺、聖福寺、元寇防塁跡…また、博多の町割・山笠が運営されている流など、秀吉が大陸との拠点として造った跡が残っている。ところが、それらを観光スポットとして整備しきれていない。博多は交流の拠点都市、福岡、博多から熊本、大分に行くというような経由地だった。トランジット都市。今でもそうだ。九州の窓口であり、アジアとの交流の窓口としてずっと生きて来た。

ここに来てやはり歴史は大切、歴史があって博多・福岡は成り立っている。それにやっと気付いたという感じ。毎年桜の開花時期に、福岡城をライトアップしている。皆さんは花見でしか行ったことがないと思うが、熊本城と比較しても、福岡城は同じように 400 年の歴史を持っている。でも熊本城は市民の皆さんの関心も高く、多額の寄付金によって整備が進んでいる。福岡市もライトアップという新しい演出で福岡城に来てもらい、興味・関心を持ってもらいたいと思っている。今までの文化資産を新たに演出して見直していくことが必要だ。過去の歴史の跡は残っているが、実は近現代になってからのアジアとの交流、特にこの 20 年、これまでの話に出てきたようにアジアフォーカス福岡国際映画祭、福岡アジア美術館、福岡アジア文化賞など、アジアとの交流の跡がきちんと整備されていない。同時に情報発信をしていない。なので、福岡市民があまり知らない。

これまでに、映画祭を通じて収蔵した映画は 900 本、アジア美術館の所蔵品は 2361 点。アジア美術館にレジデンス事業で招聘されたアジアの美術家は 60 人、アジア文化賞を受賞した人は 80 人いる。このように交流してきた人たち、形に残っているものを、部署を超えて整理し情報発信していくことがとても重要だと思う。広報課は横に串刺しができる部署だ。そこで、広報課では福岡市のホームページに文化資産アーカイブをつくろうとしている。この 20 年の文化資産である映像や美術作品などを、英語、中国語、韓国語、日本語で整備して

情報発信していこうと思っている。楽しみにしていただきたい。

帆足　私は観光、今で言う集客交流の双方向の流れを担っている部署にいて、観光やコンベンションで福岡を訪れている人向けにいろいろなサービスを行っている。現状から言うと、特に東アジア、中国、韓国、日本は、人口と経済の発展によって、今から世界でも最も大きい、未曾有の人の流れができるところで、大きな渦になっていくことは間違いない。また九州という少し小さいレベルで見ても、2011年の九州新幹線の全線開通で大きな流れができようとしている。今のうちにゲートウェイとして、通り過ぎられるだけでない福岡にしないといけない、という動きをとっている。住んで良し、訪れて良しの福岡だが、好きからアクションにつながっているかは別にして、住んで良いところは自慢している。魚を自分で獲ってきたわけではないのに「魚美味しいやろう？」と言っている。それはそれで良い。しかし、集客交流、おもてなしの分野はまだまだやらないといけないことが沢山ある。今、福岡市に訪れる国内外の旅行者は1700万人をやや切るぐらい。そのうちの外国人は70万人。昨年は韓国人がウォン安の影響で減ったが、このぐらいを潜在力として一気に行こうというところだ。観光は1回来てもらっただけではだめだ。何度も来てもらうリピーターを作らないと集客交流人数は増えていかない。そのために福岡市は部局を超えて情報を共有しないといけないぐらい色々な誘致活動を行っている。例えば、ビジットジャパンキャンペーン、修学旅行誘致、空港対策、コンベンションビューローの活動など、様々な部署が海外に行ってやってきている。それを見直して総力を挙げて、こういうターゲットに向けてやっているから、次はこういう手筈でやろうといくことを戦略的にやっていかないといけない段階にきている。先ほど紹介のあったブロガーを呼んで色んなものを紹介するということもまさにやっているところだが、もっと総力を挙げて効率よくやらねばならないと考えている。情報発信だけではだめだというお話もあったが、福岡市の集客交流サイトとして「よかなび」があり、編集に関わっている。最近、多言語で、「福岡とはこういうところだ」というのをグルメやショッピングなどのテーマ別に分けて、分り易くリニューアルしたところだ。英語、中国語（繁体・簡体）、韓国語、をはじめ、タイ、ドイツ、フランス、スペイン語と、８言語で展開している。その中にはユーチューブとリンクして動画も見せている。しかし、こちらは情報を発信しているだけなので、どういう風に受け止めてもらっているかは確認できていない。

福岡は、ゲートウェイ機能が発達しているために、一泊、一食するだけのところになってしまっている。しかし、それだけでは福岡の魅力をいつまでたっても知ってもらえない。福岡にはいろんな資産があるが、おもてなしをしたい人も沢山いる。こういった地域観光資源を知ってもらっていない。そこで今、配布した「福たび」を通じ、まち歩きや体験を市民の人を通して知ってもらうことをやっていこうとしている。これをもっと大きなうねりにして市民のみんなが繋いでいけるようにしたい。（福たび：http://yokanavi.com/jp/fukutabi/index）

さて、先生方に質問がある。福岡観光コンベンションビューローは、観光・訪

問客向けの対外的な部署なのだが、結局は、市民の人に魅力をよく知ってもらわないと広がって行かないと、この頃強く実感している。例えば、福岡タワーも太宰府も行ったというような旅行者が、飲食店に行って「どこかいいところありますか」と尋ねたら「あそことあそこは行かれましたか」と聞かれ、「行った」と答えると、「じゃ、だいたい行かれましたね、福岡観光施設ないですもんね」と言われると、もうそこで終わってしまう。そうではなくて、観光っぽくはないかもしれないが、「寺町辺りも良いとこですよ」とか、「『福たび』のような体験がいつでもできますよ。自分も体験して楽しかった」と言ってもらわないと、旅行者には魅力的に感じてもらえない。そういった意味で広げていかねばならないと思っている。例えば、アジア美術館はすごく良いところだと思う。しかし、いかんせん市民はあることは知っているが、あまり行ったことがない人が多い。それを、どうやって分かり易く広げていったらよいのかお尋ねしたい。また、先ほどシビックプライドの話にもあったように、先に形を見せていった方が、後から市民の方も「いっぱいきよんしゃーね」という流れが作れるとも思うが、今せっかく所有している資産をもっと分り易く市民の方に広めていく施策にどのようなものがあるかについてもお尋ねしたいと思う。

山下　お二人の熱い思いと現状の取り組みを伺ったが、やはり一人ひとりの市民を通じて、まちの資産を広めていくことが大切だと感じる。さて、帆足さんの質問に関して、伊藤さんに、発表で紹介いただいたバルセロナの事例についてお尋ねしたい。私も昨年、バルセロナを訪れたが、その際、市民の方々がある程度、きちんと色んな角度からまちの魅力を語れると感じた。そういったことを施策的に努力して行っているのか。ご存じだったら教えていただきたい。

伊藤　バルセロナの人々は、地域への誇りとアイデンティティの強い民族性を持っていることはひとつの要因になっている。しかしそれだけではなく、広い意味での教育にも力を入れていると思う。たとえば、行政が DVD を企画して、新聞折り込みで各戸に配布することがあるそうだ。DVD には、まちの歴史とともに、都市開発の現状と都市のビジョンを示すような内容となっており、大人向けと子ども向けのコンテンツが入っている。なかには、プロの映画監督によるものもあるそうだ。

また、しょっちゅう街の中でも展示をしている。まちがこれからこうなる、こういうことをやっている等、建物内の常設もあれば、広場のテントで展示することもある。それを、おじいさんと孫が見に来て、色々話したりしているのが、普通の状態としてある。ちゃんとまちのことを知るのがマナーと言うか、生活するとはそういうものだと思っているようなところがある。広い意味での教育は非常に大事だと思う。

山下　ＤＶＤを作り新聞に折り込むということにはすごくびっくりしたし、それがちゃんとした映画監督によるものと言うのも驚いた。一方で、並木さんは、地域住民が自らコンテンツを作っていくことが重要だと話されていた。やはりプロが作る事と住民が作る事と両方やった方が望ましいのではと思うが、住民主体でコンテンツを作り発信していくことについて、伊藤さんの話の延長上で並木

さんにも、何か良い方法があれば教えていただきたい。

並木　マスコミが伝えるものは作法などが決まっていて、自由度が少ない面もある。先ほどお話した広域行政組合でやってきた山江村の住民ディレクターというものは、プロデューサー、カメラマンになり、チームを作って展開している。取材していても方言ＯＫ、後ろで鶏が鳴いてもＯＫ。何があろうともそのままだ。地元の人が立ち話感覚で取材したり、番組を作ったりすると、自然に人が集まってきたりする。日常生活の中でのコミュニケーションをとっている。ケーブルテレビに自分の子どもが出ているとか、隣のおじいちゃんが出ているとかをきっかけにして、会話が弾み、町民がメディアを見るようになっている。

山下　ＤＶＤの全戸配布は福岡市でもできるか。

佐々木　福岡市は都会であり田舎。山江村でやっていることはアレンジすればおもしろい。お金をかけずにまさに官民共同で地域コンテンツをまとめ、発信していくということは重要な要素だ。

福岡市には大学の数が多いという特徴がある。つまり若者が多い。大学などと連携してカリキュラムに入れてもらう。またアジア美術館と市の美術館に強制的に連れて行くとか。福岡市の歴史は必ず教えるなどしてもいいかも。県外から来る人が多いので、若者から発信していくのはいいかなと思った。

帆足　外国からの日本語学生・就学生を含めるとさらに多い。現在、コンベンションビューローで留学生などの力を借りて訪問者を支援するウェルカムサポーターを組織化し、管理している。その交流会で、留学生を福岡ドームに野球観戦に連れて行ったら、そこで初めて野球を見たなどと言っていた。また博物館が前は海だったということも知らなかった。これは日本の若い学生も知らないことだ。福岡がこんな風に出来たことを知らない。でも、知ると、金印はあんなに小さい物だ、ぐらいのことしか知らなかったが、中国や韓国との交流の歴史が生き生きと感じられるようになる。そういった意味で、特に若い人たちに伝えていって、一緒に巻き込んで何かをしていくのが大事だ。

また、テレビ局と仕事すると、テレビというのは、本当に沢山の取材をするので、ありとあらゆるお店のコンテンツなどがいっぱいある。ただそれを、ＨＰに少し載せることはできても、思うようにきちんと記録用に見られる形になっていない。そういったものの力を借りて、皆で一緒になってやると、お金をかけずに皆が喜ぶものができていくのではないかなと思う。

佐々木　去年、中国、韓国のテレビ局が福岡市に相次いで取材に来られた。なぜ、福岡ドームができたのか、福岡市は百道浜のような海浜都市としての美しい景観をどう造っていったのか、そういうことを番組にしたいということだった。現代の歴史、特にここ 20～30 年の官民共同で都市を開発してきた経緯などが共有されていない。行政は縦割りなので、知るにはいろんな担当部局に行かないといけない。データがあって、まちの歴史がそこに行けばわかるという情報センター、伊藤先生が言われたようなたまり場、そこにはシビックプライドの原点があるというような場所が必要な時期になってきている。

山下　同感だ。実は今回の研究では、今日のお三方以外、男性や外国の方にも提言い

ただいた。その中で韓国の大学教授の方が言われたのが、「福岡は福岡学を作れ」だった。福岡とアジアとの関係性にフォーカスを当てた 10 冊ぐらいの歴史書を作れと。「それを見れば、私たちは福岡におけるアジアの正当性を確認できる」と。

また、中国の方はそれこそ「福岡市は、なぜどうやってこの 20 年の間にこんなに美しいまちになったのか教えてほしい」と言われた。福岡の人はドームや百道ができたことを当たり前のように思っているが、中国の 150 万や 200 万の都市で、これから栄えていきたいと思っている都市にとっては、本当に聞きたいことがあって余りあるほど。なので、きちんとやってくれれば、中国からは皆が学びに来るとおっしゃられた。

そういったこともあって、教育プログラムを作り、若いうちから教育を行い、まちの現代の歴史を学び、誇りを醸成していくことが大切だと思う。そこで、岸さんにお尋ねしたい。私は外から来た若い人たちの福岡に対する反応が気になる。先生は学生達と研究に来られているが、ほとんどが福岡は初めてという学生と聞いている。外から来た学生達にとってアジア美術館や福岡市のアジアはどのように受け止められているのだろうか。

岸　昨年９月、第４回福岡トリエンナーレの際引率した８人の学生の中には、今もアジア美術館のボランティアの方と文通している学生がいる。実際そこに行くことで、濃い関係ができてくるということがある。今話を聞きながら、そういえば、色々なエピソードがあるなあと思いだしていた。

例えば、再開発の時期に博多・川端に移って来られて、今ではアジア美術館の常連であるという地域住民の方に出会った。そういう方々が、小さな規模かもしれないけれど、人づてにアジア美術館（アジ美）の情報を伝えている。アジ美の成果について、開館から 10 年経ってこれだけかという見解もあるかもしれないが、逆に 10 年でこれだけのことをやってきたということも言える。美術館ボランティアの方々も、自分たちを広報活動などに利用してほしいと強くおっしゃっている。

そして私どもの学生も、福岡にいる間にすっかりアジ美共同体の一員であるとの意識を持つようになり、ご飯を食べに行ったら、アジ美のことを知らないというそこのマスターに逆に宣伝していたりする光景があった。今は小さなコミュニティであっても、これからも少しずつ広がって継続されていくのだろうという感触を持った。

山下　濃い（こゆい）関係を作れる。そういう関係を作れるのに、なかなか外に発信していけないのはもったいないと改めて思った。ところで、岸さんにフロアからの質問を追加でお尋ねしたい。トリエンナーレという言葉が難しい。今日初めて分かったという感想というかご意見をもらった。こういう言葉は、やはり、トリエンナーレではないといけないのでしょうか。

岸　美術の世界では２年に１度がビエンナーレ、３年に１度がトリエンナーレという言葉が定着している。福岡アジア美術館ができたときに、国際美術界に入っていくんだという意思表明があって、「アジア美術展」という名前をとりあえ

ず捨て、「トリエンナーレ」という言葉を使ったのだと思う。ただ一般に分かりにくいということに関しては、そうなのかもしれない。

山下　福岡アジア美術館は、国際基準で美術文化をサポートしていくという姿勢があってトリエンナーレという言葉を使った。そういう姿勢を表す方針を合わせて情報発信していくことが大切だと思う。さて、本当に時間がなくなってきてしまった。最後に、佐々木さん、帆足さんの現場からの熱い話を聞かれてきて、何か具体的なアイデアが浮かんできた、ということがあれば、お三方に伺いたい。

伊藤　学生が多いということに強いポテンシャルを感じた。福岡で学んだ人たちは、卒業後に福岡を離れたとしても、いろいろな場所に散らばって福岡の大使になってくれるはずなので、うまく大学や専門学校も含めて上手く連携していけるとよいのではないかと思った。若い人たちは、変化を望んでいく人達なので、うまく使うというと変だが、福岡を動かしていく力になっていくと思う。

並木　まだ福岡は余裕があると思った。私は東京出身だが、行くところは過疎地が多い。そういうところは、本当に必死でやっている。山江村、人吉は数年前から情報発信をやっているが、よく出来るなあと感じていた。今年からようやくケーブルテレビでできるようになったが、それまではポータルサイトで動画を発信していた。地域の情報を発信したいという高いモチベーションがあったと思う。大学のゼミで合宿に行って、熊本学園大学の学生とも一緒になったが、学生は単にＩＴ技術を学ぶだけでなくて、過疎地の介護施設などに行って、高齢者が何に困っているのかということをコンテンツにしてまとめていた。地域コンテンツや地域メディアを道具としてどう使うのかということがポイントで、福岡市とは規模が違うが、コミュニティがあるかどうかということで地域メディアは変わってくるのではないかと思った。

山下　今のお話に関連して、福岡は外に出て情報発信をしていかないといけないというのは、九州を背負っているからだ。ということもあるが、福岡は福岡の魅力を伝えるときには九州なしでは話ができない。そういったことを考えると、福岡には沢山大学があって、色んなところでフィールド学習をしている。でも、私達は知らない。東京大学の人が山江村に行っているなんて悔しい。ではないが、福岡からも沢山の学生が九州の色んなところに行って地域と繋がっているはずだ。それは、すごい膨大な宝で量ではないか。今の話を伺ってそんなことを思った。

並木　熊本学園大学の学生さんも村民、高齢者と話をし、また村民も高齢者も若者から色んな刺激を受けて、新しいコミュニケーションができていった。そういう内外のコミュニケーションが地域メディアを作ることによって生まれていった。

岸　「福たび」に期待したい。アジア美術館にも置かれるのだろうが、これを（発信・受信のメディアとして）利用したいと思う人は沢山いるはずだ。こういうものに福岡のアジア情報が載って、活用されていくとよいと思う。市民の皆さんが、誰かが来たら「福たびがあるよ」と言えたら、発展していけると思う。

山下　最後に佐々木さん、帆足さんにもコメントをいただきたい。

佐々木 福岡、博多は人を集めてなんぼ、集客都市として生きていくしかないまち。今までは、ほっといても若者が来ていたが、今、どうにかしないと集客できない、大きなターニングポイントに来ている。福岡のまちが衰退していくのではないかと、ちょっと痛切に感じている。

帆足　集客交流の面においては資源、宝が人だ。今日は、会場にこられている方にはすでに色んな取り組みをされている方もおられると思うが、例えば、旅行者で困っていそうな人がいたら「何かお困りですか」と、英語が分からなくても、声をかけてもらいたい。そういう気持ちだけで旅行者は嬉しくなるものだ。それだけで「やっぱ福岡はいいところやね」ということになる。お金もかからなくて良い。そういうところから始めていって実現していきたいと思っているので、よろしくお願いしたい。

山下　今日の提言を研究に反映して市に提案していきたい。最後に、私が“福岡女子×東京女子が考える”というタイトルにしたのは、今、まちづくりはハードからソフトに変わろうとしているなかで、福岡は商業とサービス業の都市で、そこで一番お金を使うのはやはり女性であったりする。そういうことを考えつつ、今日は会場に沢山の女性にいらっしゃっていただいているが、これからも、色んなまちづくりに関するフォーラムやワークショップをやっていきたいと思っているので、今後、女性にまちづくりへの参加を益々していただきたい。
女性のまちづくりへの参加は、新しい福岡の付加価値を高めていくことに繋がると思う。まだ他の都市はこういったムーブメントは始めていない。こういったムーブメントに、女性はもちろん、男性の方にもぜひ参加してほしいと思っている。

３）フォーラムの成果（アンケート結果概要）

（１）成果としてのムーブメントの創出

当日参加した市民 120 名のうち 82 名にアンケートの回答を得た。その結果、「アジア政策の理解促進」「シビックプライドの醸成」「コミュニケーションの重要性の理解」「資産活用の意識喚起」「自ら巻き込まれたいという気持ち」など、今後の「アジア政策の資産活用」を産官学民で担っていくムーブメントを少なからず起こせたことを確認した。

このような市民とともに考えるフォーラムの開催の企画・実施の重要性を改めて認識した。

（２）アンケート結果

①回答者属性の概要

●勤務先

勤務先(SA)	実数	%
官庁・公団・地方公共団体等	13	15.9
大学等教育研究機関	1	1.2
教師・教育指導者	3	3.7
会社員	25	30.5
自営業	8	9.8
派遣・アルバイト	2	2.4
NPOまちづくり団体関係等	3	3.7
主婦・主夫	4	4.9
無職	13	15.9
学生	2	2.4
その他	5	6.1
無回答	3	3.7
合計	82	100.0

●年齢

年齢(歳)	実数	%
20～29	9	12.0
30～39	19	25.3
40～49	14	18.7
50～59	5	6.7
60～69	16	21.3
70～79	11	14.7
80以上	1	1.3
合計	75	100.0

●自由記述（意見・感想など）

年齢	勤務先	その他自由記述
22	会社員	今回タイトルにもなっていますが、「女子」！「女性」の力が絶対に大きいと思います。福岡の女子はしっかりものが多いので、そんなひとたちをうまく使って(？)いけたらいいのでは？すみませんすごいアバウトで…
71	その他	市民が参加する活動、催物などをも内容とするアジア政策がとられることがのぞましい。
26	会社員	「祭り好き」「ホークス好き」という市民性をもっと活用できないのかと思います。祭りやホークスとのコラボレーション企画など…。＝メディアも取材しやすい。
73	無職	21世紀はアジア、アフリカの世紀と云っても過言でないと思われる。その中で九州とりわけ福岡は東アジア地域に於て、陸、海、空の交通を始めとして人的交流に於ても、過去、現在、未来を通して、日本の重要な拠点である事は間違いない。近い将来道州制が導入された場合、地理的条件、人の交流、経済的背景から見て福岡になる事は間違いない。そこで重要な事は、九州全域を始め広島以西を視野に入れた、人的、経済的な活性化を図る中、長期に渡る施策が重要である。
51	官庁・公団・地方公共団体等	市の枠を超える事は是非必要だと思います。
52	その他	これからは、UstreamやTwitterで市民がどんどんメディアになっていける時代です。従来メディアに頼らず、自前のコミュニティを作っていく企画が必要と思います。情報の発信、コミュニケーションは、独力で実施する時代です。
49	会社員	市民も訪問者にとっても、ハード的、ソフト面でも、居心地のよい空間作りをして欲しい。
37	官庁・公団・地方公共団体等	アジア政策に限らず、今日のご提言のように、コミュニケーションにもっと資源を投下すべきです。地域づくりも自治体行政も、本来そういうものであるべき。プロモーション、マーケティングも含めたコミュニケーション部門は是非とも必要。作りましょう！！
24	学生	距離的には「近く」ても、まだまだ精神的には「近く」ないアジア。個人一人一人がより生活の中で身近な「アジア」を発見できるような魅力的なタッチポイント(参加性の高いイベント、広告、ファッション、ライフスタイルなどの情報メディア)がもっともっと充実して、街の中に、目に見える形で出現していってほしいです。そして、「アジア」に関わることで自分の中で何が変わるのか、といったある程度のイメージの提供も必要だと思います。
85	無職	郷土芸能などの紹介イベント提案など。(時期を選んで市として実施する。)オリンピックなどよりずっと有用だと思う。

年齢	勤務先	その他自由記述
－	教師・教育指導者	「アジア地域としての福岡」1つ提案を考えています。「美容」という、美しくなる事をアジアの中での福岡で展開できれば…と考えています。福岡はおしゃれ大好きな街と女子が多いので、観光と美を結びつけて、提案したいと考えています。シビックプライドをもっと高めたいと…。
40	派遣・アルバイト	「人が宝」本当にそうだと思います。先日、台湾旅行をした際、人の温かさに触れ、大好きな街になりました。行く前は「リピートしなくていいや」と思ってたが、また行きたい街となりました。
30	会社員	大変興味深いお話が聞けてよかったです。私たち市民も何か具体的なアクションを起こし、より福岡の街を知る事ともっとPRしてほしいと思いました。海外に住んだときに福岡についての情報を知らなすぎるのを痛感した。一般的によく出ている情報については学んだが、表面的なコトしかわからず、ドコで情報を得るといいのかわからなかった。市政だより見てません。リニューアルしては？
38	派遣・アルバイト	福岡の良さ、歴史、魅力を1人1人知って、発信することの大切さはとてもわかりました。が、福岡市が、他県や他地域から集まってる人が多いので、福岡っていいよねーで終わっている気がします。だんだん福岡ネイティブの人が少なくなっているので、観光客をもてなすということまで致っていない。福岡に対してのシビックプライドがもちにくいような気がします。佐々木さんがいわれるように大学生に強制？みたいに美術館に行くような制度があればいいと思います。あと福たびの充実も可能性があると思いました。
27	教師・教育指導者	ありがとうございました。
29	教師・教育指導者	大変興味深く、面白い内容でした。有難うございました。福岡について様々な観点を見て大変参考になりました。
41	自営業	①アジアとのコミュニケーションが大切だと思う。まさに伊藤さんがおっしゃったようなコミュニケーションだと思う。②福岡の特色を強く打ち出すこと。（福岡にしかないもの）③人材ネットワークをもっと有効活用する。
46	その他	都市の視点に九州の視点を入れればもっとわかりやすく効果的な提案ができるのでは。
68	その他	福岡は外国から侵攻を受けた数少ない都市である。危機管理意識に欠ける策案は砂上の楼閣にならないか。日本は都市建設が全てにおいて危機管理の視点に欠けるのではないか。
50	会社員	行政の中だけでの動きでは、なかなか市民の理解が得られないのが実情だと思う。伊藤さんのお話の中に沢山ヒントがありました。
68	無職	福岡トリエンナーレの言葉の意味が分からず、何かアジア美術館と関係あるのかなあ、しかし何のことか分からず、ついに参加できませんでした。今日の参加者でも殆どの人が参加しておられなかったようですが、私と同じ気持ちの人が殆どだと思います。何でも横文字、仮名文字でやればよいというのではなく、()して言葉の意味（解釈）をみんなに分からせることが全員参加になるのではないでしょうか。
67	無職	コメンテータ3人は時間的にきつい。内容をシンプルにして、つっこんだ講義に結びつけるようなのが望ましい。シリーズものにしてやったらおもしろいのかもしれない…。
23	学生	「住みやすさ」が良さといわれる福岡において、生活環境とアジア政策がもっと結びついていくと、観光・生活両面において、発展できるのではないか。あるいは、既に、アジア政策が福岡の住みやすさの一因であるならば、その効果をもっとプロモートすべきと思います。
77	その他	私は福岡市内の文化財（国の重要文化財・建造物）のガイドをボランティアさせていただいています。おいでになるお客様の80%は外国・県外の方です（インターネット又ガイドブックを見て）。今までに市民で入館された方は1～3%ぐらいと推測します。しかし、来館されて殆どの市民は「こんな歴史のある、素晴しい建物とは知らなかった」といわれます。福岡市、福岡県の連携した情報発信が不足しています（市政だよりをはじめ）。まず、福岡市民がもっと福岡の魅力を知らねばなりません（アジア美術館、福岡城、承天寺、町家…）
70	無職	検証と改善が必要です。その際、市民グループ（ex:NPOなど…）の参加は不可欠です。本日は有難うございました。

年齢	勤務先	その他自由記述
60	NPO.まちづくり団体関係等	市民が自主的に街角ボランティア（旅行者や観光客で地図を持って道に迷っている人たちの道案内をする）をすることにより「福岡市はウェルカムシティだ」のイメージの定着化が「再訪問の福岡リピーター」の増加がのぞめると思う！
59	会社員	区の活用を、市の取締方針発信を市と区の役割分担をアジア政策～観光交流″まち愛着（civic pride）″においても実施する。区間の競争を。
77	無職	私のためになるお話でした。アジアにおける福岡の位置、アジア美術館、アジアマンスのすばらしさ。福岡がアジアに働きかける力をつけるには…可能性ありと感じた。校区のささやかなボランティアをしているが、シビックプライド、コミュニケーションをもっとうまく出来ないかと…。
36	官庁・公団・地方公共団体等	市役所内上層部（課長以上）の意識改革から始めるべき。守りの姿勢ではなく！！
61	大学等教育研究機関	本日の発表者の伊藤先生の「福岡のシビックプライドに灯をともそう！！」に共感した。
42	会社員	福岡がアジアの何になりたいのか。ゲートウェイ？人が来るところ？ビジネス拠点？ここから市民とのコミュニケーション、海外から来る人が何を期待しているのかをまず確認してほしい。
32	官庁・公団・地方公共団体等	・多言語表示 ・統一チケット（店舗・交通・宿泊） ・ブランド統一（食 or 自然 or 住）
37	官庁・公団・地方公共団体等	自分自身を含め、もっと福岡のよさを知り、真に好きになることから始めなければと、改めて感じた。
34	会社員	福岡市を住みやすくて楽しい街と思っている市民1人1人が市が何を軸に都市づくりを進めているのか何が行われているのか知る事からアジア政策の未来があるのかなと今日のご提言から感じました。
62	会社員	東京の若手研究家からいただいた提言、手法を用いて、福岡のアジア文化の資産をもっとPRすべき、市民のものとすべき。アジア美術館がそんなに素晴らしいものとは知りませんでした。なんか、余計なものがなんで福岡にあるのだろうと思っていました。伊藤先生のご紹介をとり入れてみたらいいと思う（市役所内、DVD作成等）。
68	無職	急には思いつかないが、まず、都市間競争に負けない都市になること。次に歴史を生かす都市になること。更に世界の都市の観光政策を勉強すること等々。
62	会社員	市民にどう動くべきかの提案が必要。アジアに参加し理解する共体的手法がない。参加の仕方が不明。＝内向きコンテンツがない。市役所がだめ！
74	無職	テーマがぼけた感じ。わかりにくいフォーラムだった。
67	NPO.まちづくり団体関係等	大変、参考になりました。興味深い内容でした。
60	会社員	テーマと流れ（内容）が少々ずれていましたネ。「政策」…と銘打ったからでしょうか？
35	無回答	「アジアとの交流」とか「みなとの歴史（2000年からここ20年、ここ最近までもふくめて）」や「1989年からの20年ちょいでまちがあたらしくできていったこと」、たとえば絵本になってるものってありますか？まちを知りたい、伝えてみたい…と思い、文字がいっぱいのものはさがしあてましたが、″絵″がやさしくやわらかく、まちを伝えてくれるものはないのかなぁ～と思っています。「女子」的というか…″かわいいまちあるき″の素材が少ないのかな？と思います。
63	無職	自分の街をもうすこし知り自分なりの研究をする事が考えされました。都市のプロジェクトに積極的に参加することが大事だと思いました。
44	自営業	「福岡らしさ」の共有、アジアに向くのは政策レベル。気質を活かしたシビックプライドを形成。それに基づく運動とそのプロモーションが必要と感じる。佐々木さんが言われた「ありのままを見せる」ことにヒントはありそう。「ふくおかありのまま！？」ふくおかありはありのままで終わるのか？東京からのお三方の話に共通していたことは、共有（sharingの意よりも共通認識の意）の重要性と理解しました。

３．民に見る「新たな都市の教育プログラム」の展開事例

１）紺屋サマースクール 2009

紺屋サマースクールは、「紺屋 2023」の事業であり、「紺屋 2023」は、トラベラーズプロジェクト（事務局トラベルフロント）が企画・運営する建物再生プロジェクトである。

古いアパートを再生利用した本プロジェクトは、2008 年から 2023 年までの 15 年間、福岡市中央区大名の紺屋町において展開されており、築約 45 年のビルの 17 部屋には、様々な業種のディレクター達が入居している。「業種・年齢・国籍・民族・時間・用途・目的、など様々な要素の雑居」という「未来の雑居ビル」をテーマに、これらの要素が、集合・離散しながら思考・試行を重ねることによって、新たな価値と文化の醸造を目指している。

紺屋サマースクールは、2009 年に始まったプロジェクトである。様々な分野の第一線で活躍する入居人達（産・官・学）が、サマースクール中は講師を務め、全国公募によって集まった 20～25 歳の若者たちとともに「都市と合宿する 3 日間」を過ごす。

2009 年のサマースクールには、全国から 30 名の学生を中心とする若者が集まり、熱い３日間を過ごした。このスクールの重要性と将来性を確認した事務局は、2010 年の開催もすでに決定している。

民による発想と、雑居する専門家の専門分野をシラバスに落とし、教育プログラムとして統合して見せることによる「人材教育のプログラム化」「有償プログラム化」「全国規模での情報発信力」は、大学院構想を考える上で、参考になるものと思われる。

紺屋サマースクール 2009 の告知文（紺屋 2023HP より）

http://travelers-project.info

「紺屋 2023」に入居する様々な業種のディレクターを中心とした講師陣が、全 36 講座を開講。受講生はその中から 1 日 3 講座、3 日間で計 9 講座を受講します。その他に、3 日目には 2 人の特別講師によるレクチャーもあります。授業の後はグループでのフィールドワーク。大名のまちに飛び出して、それぞれでテーマについて深めていきます。

最終日にはその成果発表と講師による講評が公開形式で行われます。

知識と実践、アカデミーとリアリティが交錯する 3 日間。

そこから何を感じ、学び取るか。それは受講生の皆さんに委ねられています。

名称：紺屋サマースクール 2009 －都市と合宿する3日間－

テーマ：まちの文脈をつくる

場所：紺屋 2023（福岡市中央区大名 1-14-28 第一松村ビル）

対象：20～25 歳の男女（2009/08/21 時点）

定員：30 名

受講料：18,000 円

スケジュール：朝礼 8:30ー／1 限目　9:00ー10:20／2 限目　10:30ー11:50
／3 限目　12:00ー13:20／昼休・フィールドワーク　13:30ー

特別講師：下川一哉（日経デザイン編集長）　目黒実（九州大学特任教授）

紺屋サマースクール 2009 のシラバス（紺屋 2023HP より）

http://travelers-project.info

紺屋サマースクール２００９　時間割（案）　8/21～23

	21日(金)				22日(土)				23日(日)			
	野呂 英俊	宮本 初音	樋口 龍二	田村 馨	野田 恒雄	宮本 初音	竹野 王史	スウェイン 佳子	野呂 英俊	野田 恒雄	池田 美奈子	石田 陽介
1限 9:00 -10:20	まちをグラフィックで視る	まちとアートプロジェクト―福岡の街でおこなわれたアートプロジェクト	大人の道徳―もちろん、段差はある―	街を診断し治療を考える	批評講座B―話すと問う―	まちとアートプロジェクト―別府の現代芸術フェスティバル２００９「混浴温泉世界」を振り返る	まちとファッション『ファッションに個性（地域性）はあるか』	＜感じる身体＞	まちをグラフィックで視る	批評講座C―問いかける―	編集入門―文脈のつくりかた	ソーシャル・アートセラピー入門
	岩永 一	野田 恒雄	田代 一倫	泉山 朗土	野呂 英俊	山本 義夫	田代 一倫	中庭 日出海	宮本 初音	岩永 一	スウェイン 佳子	坂下 和長
2限 10:30 -11:50	イベントプランニング（イベントをつくってみよう）	批評講座A―聞くから問うへ―	写真家による「まち」の認識	[視線+環境]	まちをグラフィックで視る	まちと情報	写真家による「まち」の認識	『物体』	まちとアートプロジェクト―福岡の街の特性とアートプロジェクトの未来像	イベントプランニング（イベントをつくってみよう）	＜感じる身体＞	肖像スタンダード
	山本 義夫	スウェイン 佳子	竹野 王史	中庭 日出海	岩永 一	坂口 光一	池田 美奈子	坂下 和長	山本 義夫	田代 一倫	竹野 王史	馬場 真理子
3限 12:00 -13:20	まちと情報	＜感じる身体＞	まちとファッション『ファッションに個性（地域性）はあるか』	『物体』	イベントプランニング（イベントをつくってみよう）	「問い」から始めるまちづくり	編集入門―文脈のつくりかた	肖像スタンダード	まちと情報	写真家による「まち」の認識	まちとファッション『ファッションに個性（地域性）はあるか』	街の中の陶磁器
	昼休憩の後 各自フィールドワーク				昼休憩の後 各自フィールドワーク				昼休憩など			
									特別講義 15:30-17:00			
									フィールドワーク成果発表・講評会 17:00-19:00			

２）福岡テンジン大学

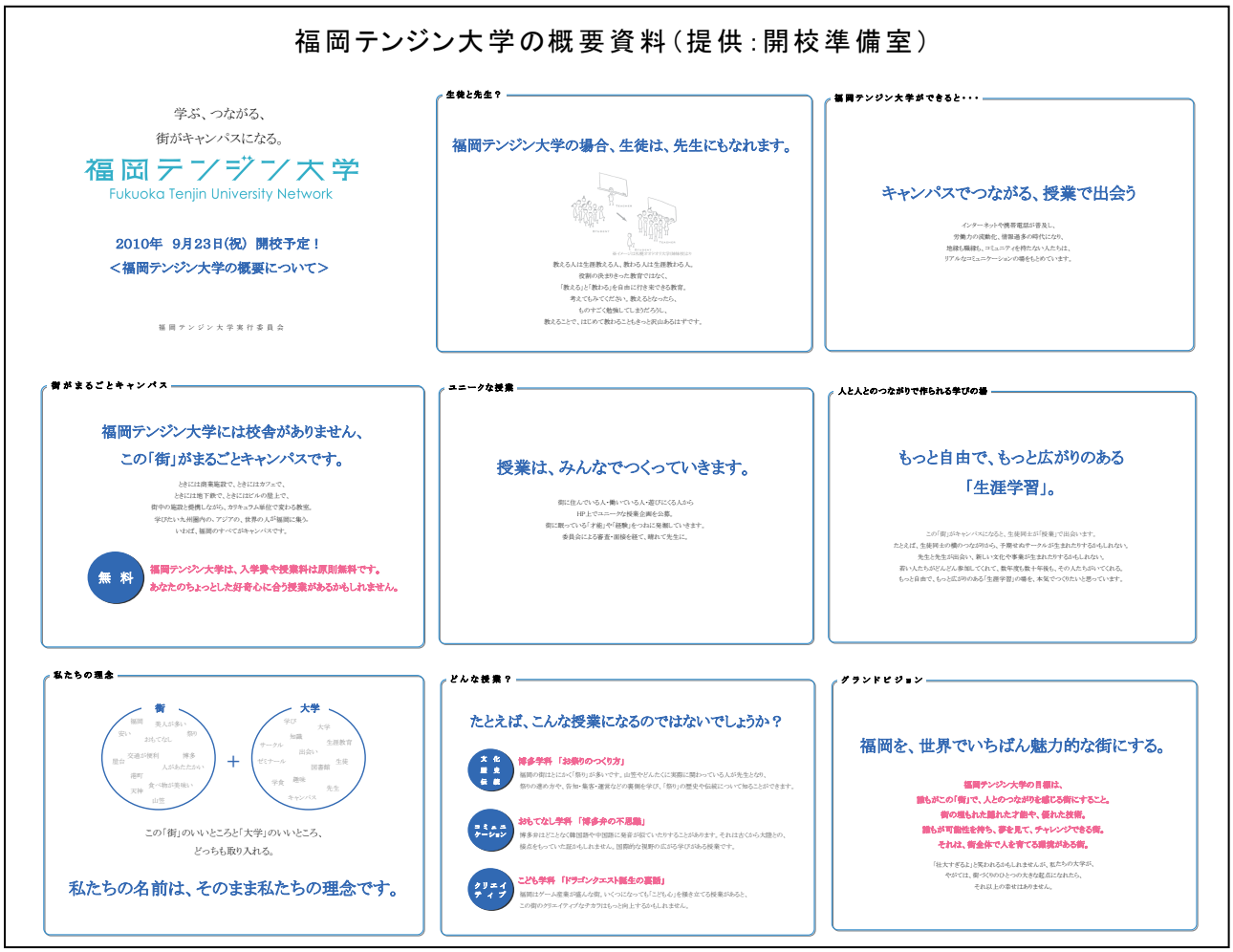
NPO 法人福岡グリーンバードは、これまで、数多くの産学官と連携したまちづくり活動を行ってきている福岡を代表するまちづくり人材・活動のプラットホームの１つである。

この福岡グリーンバードは、東京で先行する「シブヤ大学」をモデルとし、姉妹校として「福岡テンジン大学」事業を展開することになった。この事業企画は、2009 年度 11 月に福岡市の協働事業提案制度に採択され、2010 年秋の開校に向け具体的な準備が進められている。

本事業の目的は、福岡の街を舞台とした学び（生涯学習）を軸とした、新たな人と人との繋がり（コミュニティ）をつくり、各種セクターや個人など相互間のコミュニケーションの円滑・活性化、街づくりへの主体的な行動の機会を提供し、地域が抱える課題の解決をはじめとした「地域密着型の生涯学習」と「新しい地域コミュニティづくり」による、より良い街づくりである。

現在の事業計画には、大学院構想に参考になるアイデアや運営スキームが数多く見られる。「「街」がまるごとキャンパス」「福岡テンジン大学はネットワークです」という発想は、本大学院構想と考え方を同じくしている。

先行して誕生する福岡テンジン大学については、今後も情報交換しつつ、構想実現化のために連携していくべきと考える。



福岡テンジン大学

2010年9月23日(祝)、開校します。

毎月
第4土曜

この日は、街のどこかで授業を開催。
あなたがいれば、カタチが変わる。
福岡テンジン大学は、ネットワークですから。

SHIBUYA UNIVERSITY NETWORK
シブヤ大学

シブヤ大学や、その他地域にある大学ネットワークと姉妹校となります。
※学校教育法上で定められた正規の大学ではありません。生涯学習を推進する特定非営利活動法人(2011年に認証取得予定)です。

福岡テンジン大学の設立に向けたご協力・ご支援のお願い資料(提供:開校準備室)

学ぶ、つながる、
街がキャンパスになる。

福岡テンジン大学
Fukuoka Tenjin University Network

設立に向けたご協力・ご支援のお願い

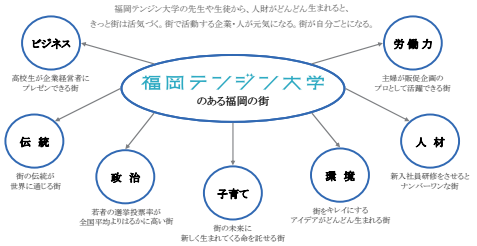
2010年9月23日(祝)開校!

福岡テンジン大学実行委員会

世界でいちばん魅力的な街とは…

街全体が人を育てていく「街」

福岡テンジン大学の先生や生徒から、人財がどんどん生まれると、
きっと街は活気づく。街で活動する企業・人が元気になる。街が自分ごとになる。



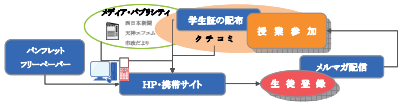
なぜ学び?なぜ無料?

学び × 無料

「学び」は、年齢や職業を飛び越えて、"街"に住む人、働く人、遊びにくる人、全てをターゲットにできるテーマであり、
"街"には多くの「おもしろいモノ」があり、それを気づく機会を与える授業を「無料」で開放することで、
「学ぶ意欲の高い人」だけではなく、「好奇心のある人」すべてが気軽に参加しやすいプロジェクトになります。

福岡テンジン大学の生徒が増えることは、この"街"が「おもしろい」と感じる人が増えること。
人が感じる小さな「おもしろい」を、限りなく大きくしたい。

【生徒を集める仕組】
シブヤ大学や姉妹校と同じく、インターネットをフル活用します。また独自に携帯サイトや、
学生証など、クチコミ誘導ツールを制作し、コストをかけずに集客できる仕組みで運営していきます。
授業はボランティアスタッフにより運営し、活動を継続させていくことで街への浸透を図ります。



まずは継続した活動を

街が元気になると、
街で活動する人・企業が元気になる。

循環モデル

まずは継続した活動から、ムーブメントへ。
このプロジェクトでは、生徒が学び合い、成長していき、コミュニティを形成することと、
授業という様々なアイデアで"街"の活性化を行っていきます。
福岡に住む人・働く人・遊びにくる人が学び、繋がっていくことで、"街"が元気になるモデルを作ります。

設立支援のお願い

福岡を元気で魅力的にするプロジェクトに、
共感いただけますでしょうか。

設立支援金	■コミュニティサポーター(個人)…… 一口 5,000円 ■コーポレートサポーター(法人)…… 一口 3万円 何口でもご協賛いただけます。複数口のご協力をお願い申し上げます。

その他に、ワークスペースの提供、先生候補の紹介、賛同・支援を募集しています。

設立支援をいただいたサポーターへは、設立準備ホームページおよびブログでの名前の掲載、
開校後のホームページでの「設立支援サポーターページ」にて掲載いたします。
2010年末には、開校後の報告およびサポーター同士の交流パーティーの開催なども予定しています。
また2010年6月末までに支援いただいたコーポレートサポーターへは、
「福岡テンジン大学 初年度パンフレット」に名前の掲載をさせていただきます。

４．主な参考文献

シビックプライド研究会（2008）：シビックプライド研究会「シビックプライド」宣伝会議，2008 年

山下（2008）：山下永子「地方の国際政策-連携・ネットワーク戦略の展開-」成文堂，2008 年

研究主担当（全文執筆）
研究主査　山下永子
研究副担当
交流推進係長　山本公平
主任研究員　唐　寅

福岡市におけるアジア政策の過去・現在・未来　２

ーアジア政策資産で福岡市の豊かな未来を創るー

【最終報告　提言　-未来-】

2010 年 3 月
財団法人　福岡アジア都市研究所
〒810-0001　福岡市中央区天神 1 丁目 10-1
電話　092-733-5686
URL　www.urc.or.jp